
ドラゴンクエスト～the fairy tile～

鳥山and矢吹and尾田先生が神！

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ドラゴンクエストの the fairy tale

【Nコード】

N1392X

【作者名】

鳥山 and 矢吹 and 尾田先生が神！

【あらすじ】

ドラゴンクエストの世界をオリジナルに変えていった、おとぎ話風ストーリー！

桃から生まれた勇者や、毒林檎を食べさせられた可哀想な少女、カエルに変えられた王子など、さまざまなおとぎ話、童話が登場します。

桃から生まれた・・・（前書き）

今回は、あの、桃から生まれた大勇者の話です。

出生の方法や、そのほかの登場人物を多少いじくってありますが、ご理解を願っています。

桃から生まれた・・・

昔々・・・とある村に住む、一組の老夫婦から、とある冒険がスタートする。

この冒険は、着々と言い伝えられ、現代でも、勇者の冒険物語の一つとして、子供から、大人まで、誰一人として知らないものはいない。

これは、そんな、世界を救った、勇者の冒険である・・・。

今となつては昔のことだが、ある村に、老夫婦が住んでいたそうだが、そこに住むのは、狩人であるお祖父さん、専業主婦であるお祖母さん。

二人が仲良く過ごしていたそうだ。

ある日、お祖父さんは山に狩りをしに、お祖母さんは、川へ洗濯をしに、家を離れていった。

お祖母さんが川で洗濯をしていると、

「おや・・・？何だろうね・・・？」

川上から、大きな大きな、桃が流れてきた。

お祖母さんは、その桃を何とかして掴み、家へ持ち帰った・・・。

その晩、二人は、大きな桃を二つに割って見た。
すると・・・、

桃の中には眩しい光が輝き始めた。

やがて、その光は人間の形に変化していく。

人の形に変化していったそれは、光を徐々に弱めていった。

お祖父さんとお祖母さんが見える頃まで光が静まると、そこには、
玉のように丸々とした、男の子が、おんぎゃあおんぎゃあと、大きな声をあげて泣いていた。

その少年は、すくすくと大きくなった。

その少年の名前は、モローと名付けられた。

モローは小さな頃から、パワーには自信があり、年上の人たちをも
チャンバラで負かしてしまうほどだ。

「お祖父さん！僕に狩りの仕方を教えてください！」

「そうか・・・狩りをか・・・。わかった。一緒に狩りをしにいこ
う」

お祖父さんは、モローをつれていくことにした。

そこは、家から少しずつ離れた山に出掛けた。

その山は「魔山^{まさん}」と呼ばれている山で、魔物が非常に多くうろついている。

その魔物の種類も豊富なので、相当な實力の人しかあまり入ることを許されない。

「モロー。今からあのドラゴンを捕まえる。お前にはまだやつは強い。ここですばらく見ているんだ」

やつは、ドラゴン系のモンスター、コドラだ。

コドラは強力な技をしかけることも多い。

狩人のなかでは、捕まえることができるからどうかも、一つの強さの基準らしい。

「よしつ。いまだ！」

遠くからじつとコドラの様子を確かめ、弓矢を放った。

矢はしっかりとコドラの急所に炸裂し、コドラは大ダメージを食らわせた。

そして、草影から飛び出し、槍を突き刺した。

「ギャオオオオオ！」

最後の叫びを盛大に鳴き、そのまま倒れた。

「お祖父さん。すごい！」

「まあな。お前もこれくらい強い狩人になれるといいな」

「頑張つて練習するよ！」

しかし、モローは気がつかなかったのだ。
自分の後ろにいる、魔物の姿を・・・。

「ギヤアアアアアアア！」

その姿から見ると、キメラのようだ。

キメラは厄介な生物だ。

炎の息をばく、超強力な生物だ。

モローのレベルでは、キメラは強力すぎる！！

「モロー！！よけるんだ！」

お祖父さんは、モローを弾き飛ばす。

無論、キメラは襲うつもりで現れたため、くちばしによる攻撃をしかけた。

モローはバランスをくずし倒れた。

モローは尻餅をつき、とても痛かったが、そんなことを言っている余裕など、ほとんどないに等しかった。

なぜなら目の前には・・・。

「・・・うぐ・・・」

くしばしが突き刺さり、苦しそうに血を流した部分を押さえている、お祖父さんがいたのだから・・・。

「お祖父さんっ！」

モローは、近くに駆け寄った。

顔を真っ青に染まり、冷や汗も流れていた。

お祖父さんも、心配してくれているのがわかり、

「だ．．いじよ．．ぶ．．だ．．。これくらい．．。」
「む、無理しないで．．．！」

お祖父さんは、槍を構える。

しかし、傷口からはまだ血が流れ、いつこうに止まりはしなかった。
お祖父さんは、多量出血による貧血で、ばたり．．と倒れてしまった。

「お祖父さんっ！！」

近くに駆け寄ると、息はしているようだが、意識がない。
モローは自分に対しての憎悪が燃え上がった。

「僕の．．僕のせいだ．．。僕が．．連れて行ってほしいなんて．．言わなかったら．．。」

キメラは、標的をモローに変えた。
モローはお祖父さんの槍を持つ。
キツとキメラを睨むと．．。

「お祖父さんの．．敵を取ってやる！」

キメラと戦う、決意をした。

桃の戦い（前書き）

今回は、原作にはないストーリーです。

桃の戦い

槍を構えるモロー。

モローはキメラに向かって攻撃した。

しかし、キメラには、全く効いていない。

力がないため、突き刺すこともできない。

まだ力の弱い証拠だ。

キメラも攻撃をする。

炎の息や、くちばしでの攻撃を重ねた。

モローは、必死に防御体制をとった。

何度となく、岩にぶつかったり、ころんだりをしたが、傷はかすり傷程度の軽いものばかりだ。

「こ、このままじゃ・・・やられちゃう・・・」

ついにモローは追い詰められた。

すばやく攻めいつてくるキメラに押され押されしながら、とうとう崖の端だ。

一歩下がれば、谷底に落ちる。

モローはどうしようもなくなった。

このまま、谷底に落ちるなんて、嫌だ！

モローは会心の一撃を繰り出す。

当たったのは、くちばしのなか。

そう、口のなかだ。

口のなかに槍をぶちこまれたキメラは、そのまま戦闘不能になり、地面へ落ちた。

「うぐ・・・ぐすん・・・！」

今日のあまりにも怖い体験に、泣きながら、お祖父さんを背負って、帰っていった。

お祖父さんは、何とか一命をとりとめた。

しばらくは安静にしないではいけませんが、なんと命に別状はなくて済んだ。

しかし、モローは二度と、狩りに連れて行ってほしいと言わなかった。

あれほどの怖い体験、もうそんな体験はしたくない。

確かに、それを一理ある。

しかし、真の理由は、そうではない。

弱いままの自分じゃだめだと気づいたのだ。

本当に、お祖父さんに助けられてばかりじゃ、ダメだと気がついた。

モローはその日から、竹刀や木刀、竹槍などを使つての修行を始めた。

毎日毎日、日が上る前から、日が落ちる寸前まで、修行に没頭した。日に日に修行を重ねていくうちに、大人をも負かす勢いに成長していった。

（ここからは、モロー目線です！）

僕は、お祖父さんと、決闘を申し込んだ。

これは、ただの決闘じゃない。

修行の成果を示す、卒業テストだ。

お祖父さんは、若かりし日に、修行を重ね、昔の勇者の一味にも入っていたらしい。

つまりは、ものすごい人物だった。

これまで、二、三度、決闘を申し込み、戦っていたのに、なかなか勝てずにてこずっていた。

並大抵の大人じゃないのだ。

「いくぞ・・・。お祖父さんっ！」

「こいつ。モロー」

僕は剣を振るう。

しかし、お祖父さんはひょいとかわし、槍の攻撃が可能なくらいに、身を引き、突きを開始した。

鋭い突きを僕は、右や左にかわしていき、ずっと間合いを詰めた。

「うおりゃあっ！」

しかし、お祖父さんは槍の柄の部分を器用に使って、上手いこと剣をかわしていく。

「くっそお！」

「おりゃおりゃ、短気な剣士は戦いには向かんぞ」

まだお祖父さんは余裕に溢れているようだ。

剣の速度をあげて、振るっていく。

ひゅんひゅんひゅんひゅんひゅん・・・

連続攻撃を幾度となく繰り返すけど、全くもって効いていない。

そして、

「すきありっ！」

僕の足を引つ掻け、転ばせた。

「うわっ!!」

しかし、僕は尻餅をついていない。

こけた瞬間に、僕はくるりと、ばくてんをして、体勢を建て直す。

「ありゃあ……。こりゃ、なかなか勝てないな」

「まだまだ若いもんには負けんぞ」

僕はお祖父さんには、本気で戦おうと決める。

「よし。今までの大人るときでは、一切使わなかった、本気で行くよ！」

「ほ、本気・・・？」

僕は剣にメラを唱えた。

最近に読んだ本に載っていた初級呪文のメラを覚えた。

そして、僕はそれを応用した、新技を編み出したのだ。

「いくぞ！魔法剣だ！」

火炎により、パワーを増した斬撃に、お祖父さんは吹っ飛んだ。

「こりゃあ、わしの敗けだ。すごいな」
「まあ。たくさん修行しましたから」

そして、僕の勝ちが決定した。

桃、旅立つ

「お祖父さん、お祖母さん。僕、旅がしたいんだ！」

僕は、お祖父さんとお祖母さんに告白した。

僕が冒険をしたいといった理由は、

「僕、いろんなところに出掛けてみたいんだ！世界中に行って、色々見たいんだ！」

僕も、かなりレベルが上がったと思う。

だから、僕も、旅立ちたい。

「そーか。そーか。お前もやはり、そうやって旅立つ日が来たか」

お祖父さんは、僕が冒険に出るというと、納得したような様子で示した。

「お祖父さんに似たんだねえ。やっぱりそうなんだね」

お祖母さんもしみじみと笑っている。

「じゃあ、明日は旅出じゃ。今日は宴じゃな。ばあさん」

「そうですね」

すごく早くに決定してしまいました・・・。

その夜。

村をあげての、大宴会になりました。

祭りでもないのに、男性陣は歌うは踊るわ。
女性陣も全勢力をあげて料理を作ってくれました。
みな、この村の特産品をふんだんに作った料理でした。

次の日、いよいよ旅出だ。

お祖母さんはお弁当がわりに、吉備団子を作ってくれました。
僕はそれを大事に受け取り、ついに旅たつことにしました。

武器は長年愛用した、日本刀。

服は旅人の服。

靴はただの靴で、ズボンもただの布のズボンだ。
鎧はつけていない。

はじめの僕はこんな感じの装備だ。
僕は、冒険をはじめた。

次の村へいく途中に、ある一匹のモンスターと出会った。
そのモンスターは、メタルスライムだ。

滅多に見ることの出来ないモンスターだ。
大量の経験を得ることが出来るため、こいつを見かけたら、倒さな
いというやつは絶対にいない。

僕も例外ではなく、ささっと、身を構えた。

しかし、一方のメタルスライムは、体をがたと震わせ、戦える

ような状況ではなかった。

逆に、草むらへいとも簡単に逃げ込む方へいこうとしていた。

僕は、ふと、剣を納めた。

「大丈夫か。その、メタルスライム」

メタルスライムは、がたがたとはじめは僕を敬遠していたようだが、僕に戦う気がないと悟ると、堂々と姿を見せた。

「！！？」

僕は、それを見て驚いた。

メタルスライムは、相当な酷い、傷を負っていたのだ。

メタルスライムは、スライム系統のモンスター、つまり、最下級レベルのモンスターだ。

とはいえ、体は鋼鉄で出来ていて、最強の武闘家であったとしても、その速度には叶わないという、超高速が持ち味だ。

この鋼鉄で出来た体に傷をつけた人間がいるとすれば、それはとてもすごいことだし、また、いざとなれば逃げることも出来るはずのメタルスライムが、かなり重度の傷を負っているというのも、不思議な話だ。

「とにかく、教会が何かに行こう。もしかしたら傷を癒してくれる僧侶がいるかもしれない」

すぐ近くにある、ものすごい小さな村へついた。

その村は、数件の家と、一つの寂れた教会、さらにはつぶれそうなくらい貧相な宿屋があった。

背に腹は変えられない。

メタルスライムを、教会へ連れていった。

「まあ・・・こんなに大きな傷を負ってしまったているとは・・・あなたに、神のご加護があらんことを・・・」

そういうと、そこにいたたった一人の女僧侶が、メタルスライムにホイミをかけた。
傷はみるみるうちに癒えていき、もとの光沢感あふれる体へと戻っていった。

「このものは、あなたにお仕えしたいようです。どうか、あなたの元で、過ごさせていただけないでしょうか」

この僧侶は、ものすごいことに、メタルスライムと意思疎通が出来た。

いや、もしかすると、神のお告げによる効果なのかも知れない。
僕もさきほど、あと7の経験で、レベルが上がると、よくわからないことを言われた。

あと7の経験って、どれくらいでしょうね？

話がずれてしまいました。

それより、メタルスライムが、仲間になりたいと言っている。

現在、僕に、仲間パーティと呼べるような者はいない。

もしかしたら、これから、仲間パーティはできないかも知れない。

この、メタルスライムは貴重な仲間パーティだ！

「よし。僕と一緒に冒険、しにいくか！」

メタルスライムも嬉しそうに笑っていた。

桃、旅立つ（後書き）

はじめての仲間が出ました。他のキャラクターも色々出しますので。

桃と・・・？（前書き）

文章少な目です。

桃と・・・？

そのあとは、なぜだか、また同じようにモンスターを手に入れられた。

ドラゴスライムとスライムつむりだ。

どうやらメタルスライムの仲間だったらしく、快く仲間^{パーティ}に入ってくれた。

こうして僕の、モンスターレジェンドチームが完成した。

こうして、次の村へ行くことにした。

次の村へいくには、ドラゴンの谷を抜けなくてはいけない。

ドラゴンの谷は、かつて、この近くに、伝説の竜、マスタードラゴンが降りたと言われている、伝説の聖地だ。

そのため、その周囲にはドラゴンがたくさんいるのだ。

それも、かなり強力なドラゴンだ。

そのため、この周囲には家もない上に、他のモンスターは一切存在しない。

ドラゴンほど強力なモンスターはいない。

僕たちは、できるだけこそつと、気配を消して、草むらをこそこそと隠れながら行った。

さすがに、今のレベルでは、強い敵なら一瞬にして倒されてしまう。究極の防御力を誇るメタルスライムでさえ、相当なダメージを追われるに違いないのだから。

「こ、こんなところ・・・早く抜け出したいな」

今、目の前に三体のドラゴンがいる。
そのせいでなかなか前に進めなくなってしまった。

「グルルル・・・」

ドラゴンたちはどうやら仲間らしい。
近くにある湖で、水を飲み、遊んでいるようだ。

「そ〜つと・・・そ〜つと・・・」

ガサツ！

草むらから出た瞬間、気づかれてしまったようだ・・・。

「ガアアアアアアアッ！！」

気づかれたのは、アルゴリザード。
赤色の二足歩行型ドラゴンだ。
攻撃力が半端なく強い。

今の僕のレベルの場合は、相当苦勞してやらないといけない。

「うまく引き付けて・・・今だっ！」

剣をつきだし、首辺りに斬撃を食らわすが・・・。

「グルルルル」

対して効いてはいない、というより、武器を使ってしまったせいで、
逆にやつを怒らせてしまったようだ。

「ガアアアア!!」

やつは噛みついて攻撃をしてくる。

僕は必死に何とかかわす、隙をつき、連続的な攻撃を行っても、やつの強靱な肌には無効だった。

「仕方ない。呪文だ!」

メラー!!

ドラゴスライムとメタルスライム、さらにはスライムつむりとの四人体制でのメラを打った。

だが、

「ギャオオオ!」

やつの頑丈な肉体には、少し焼き跡がついただけで、あまり効果は得ていなかったのだ。

僕は剣にメラを打ち込み、魔法剣を使った。

「メラ斬り!!」

そしてついに、

ズシャアアア!!

アルゴリザードは真っ二つに裂かれて、倒すことが出来た・・・。

「っふう〜!」

僕は、どうにか倒せたという、達成感、そして、疲労感、安心感、それらが入り交じり、虚脱感となって現れた。

「ギャアアオオオオオオ!!」

しかし、もう一体、背中にいることには気づいていなかった。

僕が安心していただけのかわかったのか、そいつは僕に襲いかかろうとする。

僕は剣を納めてしまっていた、今から剣を出して切り込むには、あまりにも時間が足りない……。

しかし、次の瞬間、一閃の光が放たれ、もう一体のモンスターは気がつく、真つ二つに割かれていたのだ。

「ったく。この辺りのモンスターは危険やから。なめとると、痛いめにあうで!」

目の前に現れた、鉞を持った謎の少年。

「ピピーンッ!」

そして、メタルスライムは驚いて、僕の背中に隠れた。

いったい、何者なんだ?こいつは?

桃と・・・？（後書き）

鉈を担いだ少年・・・無論、彼だ・・・。

桃と金（前書き）

決闘をする話です。

桃と金

鉞を持ったその少年、僕より年が少し若いであろう、その少年は、僕がさつき、あれほど苦労したアルゴリザードをたった一撃で倒してしまった。

つまり、さきほどの攻撃は、僕が使った、魔法剣並のパワーを誇るほどだ。

「あんた、なかなかやりおるな。このモンスターは熟練の旅人でもなかなか倒すん難しいのに、あんたはただの旅人ちゃうんやな」

「あ、ああ・・・」

「そうや。俺の家に来るか？あんたみたいに強いやついたら大歓迎やで！」

しかし、一人だけ、ふるふると首を横にふるものがいた。それは、僕の仲間である、メタルスライムだ。

「どうした？お前？」

「ん？そのメタルスライム、どっかで見たことあるな？」

彼は首をかしげる。

確かに見たことのある、メタルスライムを記憶のなかから探す。

「こいつは、草むらのなかで怪我をしてたんだ。だから、僕が引き取ったんだ」

「あ！！思い出した！」

ふと、思い出したように、手をぽんつと叩く。

「そいつ、俺が倒したメタルスライムや！俺の鉈で振るったら、一瞬にして吹っ飛ぶほどの弱さやったで！んな弱いもん仲間にしてどうすんの？」

倒した？こいつが？

弱いだと？こいつが・・・？

「おい。てめえ、何様のつもりだよ？・・・僕の仲間に対して、弱いなんて・・・、絶対に許さねえ！さっきの発言、撤回してもらおうか！」

しかし、やつと言った台詞は、とんでもないものだった。

「はっ！何言つとんのや！弱いもんに弱いゆうてなにが悪いねん！
！」

「貴様・・・。その台詞、僕に対する、挑戦ってことでいいのか？」
「挑戦？やめとけやめとけ。俺が本気出したらあんなにか一瞬で終わってまう。無駄な体力を消費するんはやめとけ」

僕は日本刀を抜いた。

仲間をどうたらこうたら言われるのは、僕の性に合わない。

「本当にやるんやな？」

「ああ。当たり前だ」

僕がはじめに斬りかかっていく。

しかし、彼は楽々とかわす、そして、鉈を振るってきた。
切れ味は剣よりも断然高い。

剣を合いの手に入れるのも、パワーで押されてしまう。
なんとかギリギリのところをかわしていった。

「ほう。なかなかやるな。じゃあ、次は本気モードでいくぜ」

僕はメラを剣にかける。

魔法剣を放った。

「おお。これ待ってたんや。魔法剣！」

「そりゃ光栄だ！」

僕とあいつは、一進一退だ。

おたがいに攻撃をして、かわしていく。

両方とも、かなり強い。

「ふう……。うれしいな……。こんな強いやつと会えるなんてな」

「そうか？」

「前言撤回したるわ。あんたはとても強い。やからな、あんたの仲間も、間違いないくらい強いな。類は友を呼ぶんや」

「だけど、こんないい勝負、終わらせるのはもったいねえ！最後までやるぜ！」

僕と彼は、最後の力を振り絞り、

「メラ斬り！！」

「一閃特攻！！」

彼は、超高速で鉞を縦と横、十字に振るう。
最高技同士が衝突し、爆発した・・・。

結局、勝負は引き分けに終わった。

「なあなあ。俺を仲間にしてくれへんか？俺の名前は、キーンって
いうんや。よろしくな！」

「ああ。お前みたいなのがいると楽しいよ。僕の名前はモローだ。
よろしくな」

僕らはがっちりと握手をかわした。

プロフィール（前書き）

とりあえずキャラ紹介です。

これはどっぴつこと？と思つことは、感想をお願いします。

プロフィール

モロー（勇者・男）

桃から生まれた勇者。お祖父さんと一緒に狩りをしたのがきっかけで修行をはじめた。
力はキーンに劣るものの、必殺の魔法剣はパワー抜群。

〈技〉

魔法剣メラ斬り

〈呪文〉

メラ

スカラ

キーン（戦士・男）

鉞での攻撃が得意なパワー自慢の戦士。力においてはモローよりも強い。決闘で絆が芽生えたおかげで、今では心開いている。話す言葉はなぜか関西弁。

〈技〉

一閃特攻

超高速で鉞を十字に振るう。あまりの早さに、一筋の光が通ったようにみえる。

〈呪文〉

なし。

メタルスライム

かつてキーンと戦い、大きな傷を負わされた。今は仲間として認めているらしい。

く 技 く

メタルアタック

体当たりをすること。

く 呪文 く

メラ

ドラゴスライム

メタルスライムの友人の魔物。ドラゴンのようにパワーは強い。レジェンドチームのパワー自慢。

く 技 く

なし

く 呪文 く

メラ

イオ

スライムつむり

同じくメタルスライムの友人。殻にこもると、絶対的な防御力が得

られる。回復魔法が得意。

く技く

閉じ籠り

殻にこもって出てこなくなる。しばらくは攻撃も呪文も通じない。

く呪文く

ホイミ

スカラ

ザメハ

プロフィール（後書き）

魔法剣はのちにシリーズ化をいたします。

金の戦い

しばらく歩くと、ドラゴンの谷は通り抜け、城下町へ出られた。
このあたりは、オダ王国の領土で、世界でもかなりの盛り上がりを見せている国だ。

近頃法律として立てられた、楽市楽座の令のおかげで、商売が非常にいきなり、町自体にも活気が溢れる。
今は一番の富がある町だろう。

「このあたりには、かなりいい道具や武器がありそうだな」

今日はこの町で、のんびりとすることになった。

「らっしやい！らっしやい！シルクで出来たマントだよ！肌触り最高！ぜひ買っておくれ！」

「ローマ渡来の武器だよ。いらんかね」

どこも大盛況の様子で、僕らも人混みに紛れて、あっちやらこっちやらにとばされまくっていた。

しかし、しばらくして市場を抜け、とある橋にやってきたときだ。

「おい。ここを通りたければ刀をよこせ！」

かなり図体のかたい、そして人相の悪い僧侶の格好をした男が立つ

ているのだ。

「ああ？それはいったいどういう意味だ？」

「簡単なことだ。俺はここで、一ヶ月前から腕試しをしてるんだ。俺に勝てば、この場を通してやる。負ければ、剣を渡し、今すぐに立ち去ってもらう」

ようは、盗賊の類い。

「ほう。あんた、ちょっとばかり腕に自信があるんやな。でも、ちょっと強いくらいじゃ、俺らは倒せんで！」

キーンが前に出た。

僕も剣を構えていたが、それよりも前に出て、鉞を構えた。

どうやら、本気モードの戦いらしい。

あいても、自慢の長刀を構えた。

長刀とは槍のように長い柄の先に、刃がとりつけられているものだ。僧侶などが、自衛のために身に付けることがあるらしい。

彼ははじめに大きく長刀を振るう。

身軽にかわしたキーンは、そのまま鉞を振り下ろす。

それを読んだのか、長刀をすつと、手元に引き戻した。

どうやら、突きをかけるようだ。

長刀を使った、突きの攻撃がはじまった。

鉞を盾ににして、なんとかキーンは体勢を建て直す。

長刀を大きく振るうと、それをいかして、前に間合いを詰める。いつきに鉞を振り下ろすが、

ガシィィィ

「な・・・!？」

「手で・・・掴みやがった・・・」

手で鉞を掴んでいた。

鉞のような刃物は、木を切るために用いられている。

つまりは、相当な切れ味だ。

それをまさか、素手で受け止めるとは・・・。

「くそっ！」

キーンは、再び、遠退いた。

長期戦になりそうだ・・・。

「はあ・・・っ・・・はあ・・・！」

「どうした！さっきまでの勢いは！」

キーンのスタミナは、軽く限界の位置にまでなってきた。

息切れは激しく、すでに肩で息をしている。

なんとか長刀の攻撃はかわしているものの、危うく何度かは当たりそうになった。

「逃げ足だけはまだ健在か？」

「くそ・・・っ。こいつ、強い・・・！」

キーンは最後の攻撃を繰り出そうと決めた。
彼が振るった長刀に合いの手を入れると、そのまま間合いを詰める。
そして、

「こうなれば！必殺！一閃特攻！！」

「無駄だ無駄だ！」

何度も何度も、鉈を振るうが、全て手で受けられてしまっている。
まさか・・・ここまで強いとは！

「こちららも必殺技を使わせてもらっぞ！会心乱芯突き！！」

長刀から、連続的な高速の突きが食らう。

キーンは、少し、遅れたので、全て会心の当たりだ。

「終わった・・・！」

キーンは、倒れた・・・。

次にキーンが目を覚ましたとき、そこは宿屋。

「俺・・・負けたのか・・・」

ボロな天井を見つめ、俺はそう呟いた。

すると、隣でなぜか座っている、見知らぬ男性が、

「モロー殿！目を覚まされたぞ！」

彼は、オダ王国の戦士、つまりは「侍」のようなのだが……。

「キーン！目を覚ましてくれたか！？」

「お……おお」

モローはどうやら、何かを買ってきたようで、小銭の入った袋を、手にしていた。

「よかった……倒れてから一日ずっと目を覚まさないから心配したよ……」

モローの目の下には、真っ黒なくまが出来ていた。どうやら徹夜で看病をしてくれていたらしい。

「で、彼は……？」

俺は、隣にいる侍のことを尋ねた。

「ああ。この人？どうやら、この国の兵隊の一人らしいよ。国の中でも、あの橋のことは問題になってるらしい。あいつの名前は、ベンケイって言うんだとよ。相当強い腕前らしい。で、だ。この王様、ノブナが様が、退治したものには、賞金を分け与えるっていつてくれてるらしいんだ。別に僕は、お金のことはいいんだけど、国中の人困ってるなら、助けてあげたいって思っただけど……」

その気持ちは、俺も変わりはない。

だけど、あいつのパワーはあまりにも規格外。

盗賊って、あそこまでパワーがあがるものなんだろうか？

「でも・・・あいつのパワーはあまりにも・・・」

「わかってる。だから、さすがの僕も、なんとか勝つ方法を探して、城の図書館を借りたりして調べたよ。で、新しい呪文を覚えたんだ。マヌーサっていう呪文を」

「マヌーサ・・・。それがあれば、やつを倒せるんだな？」

「ああ」

次の日、またキーンのリベンジが始まる。

金の戦い（後書き）

日本に起きた歴史的な出来事を書いてみました。

オダ王国の首都は、アヅチというところですよ。

金の再戦闘

俺は再び、あの橋へやってきた。

「なんだ？また、やられに来たってか？」

ベンケイは、長刀を構え、斜に構えている。

俺は、ベンケイに鉞をとられてしまったので、

「今度は、剣だ！」

その剣は、魔剣士の剣という、かつて、魔法の力によって錬金した、最強の剣士が見につけていたらしい。

「はっはー！自慢の鉞は盗られたからな（俺に）！今度は剣で勝負だ？また負けて持ち主は俺に変わるんだ。戦うだけ無駄だぜ！」

「それはどうかな！俺の底力、今こそもう一度、見せてやるぜ！」

キンッ！

キンッキンッキンッ

ガッチイ・・・・・・！！

シュンッ！

カンッ

カンッ

カンッ

カンッ

シュンッ！

シュッシュッ

キンキンキンキン

シュンッ！

カーーーンッ！

「はぁ・・・はぁ・・・！さすがに・・・ねばるなあ！その辺の侍
よか、よっぽど強いぞ」

「誉めても何も出ないぜ。その無駄口、今にも叩けなくしてやるわ
！」

シュンッ！

「・・・！？」

「今やつ！！」

新技！

妄心斬撃！！

俺の一撃は、盾にした長刀と一緒に、ベンケイを橋の反対側まで吹
っ飛ばしていったのだ。

「ぐぬう・・・さつきから、何度か不思議な感覚だ。斬ったと思っ
ても、それは残像で、何度と斬っても、かわされてしまう！」

「・・・・・・・・」

俺は何も言わずに、剣を振るう。

「甘いわ!」

ベンケイは、真っ直ぐに直進してきた俺を、切り裂こうと長刀を大きく振るった。
だが!

シュンッ!

「ま、またか!」

消えた俺は、上にあがっている。

「終わりや!!」

ザガアアアアアアアアアア!!

「・・・・・・・・・・やっぱりあかんわ。こんな勝ち方は」
「へ!?!」

俺は、魔剣士の剣をモローに返した。

「悪かったなあ、ベンケイ。これな、実は、マヌーサって呪文がかつとる剣なんや。俺が思った時に、幻を見せることができる。これで俺の動きを攪乱させて、お前に攻撃を仕掛けとったわけや。でも、これやと意味ないな。やっぱ、一對一で決着つけんとな！」

俺は、拳で戦うことにした。

「はは！拳なんかで、この俺に勝とうなんざ、百年早いわ！！」
「そうか。なら、いくで！」

ビュンッ！！

「は、はやっ！？」

ドンッ！

俺は、いきなり攻撃をして見せた。

ベンケイの頬に一発のパンチをお見舞いしたのだ。

「はは。はははは！騙されんぞ！もゝ騙されん！！これもマヌーサの効果だろ！お前がこんなに早く動けるわけがない！今までも、めちゃくちゃ遅かったんだ！これはそうや！幻だ！」

「がはは。バカを抜かせ。視覚は確かにごまかせるけどやな、触覚まで騙されるわけないやろ！俺はな、いつもあの鉞で、パワーを極度にあげて、それ以外は少し落とすトンねん。武器が鉞やなきや、これくらいのスピードが出せんねや！」

「ぐぬ・・・」

シュツ！
ガチン！

バシバシバシュン！

「ぐぬぬ・・・」

「強いなあゝ。あんたはあゝ！こんな強いのに何でみんなを困らせんねん。この力を正義に生かせや！」

「うるさいっ！俺にだって、考えてやってるんだ。お前にどうこう言われる筋合いはないわ！そして、奪い取った剣は、俺の生きる糧にさせてもらってんだ。俺の役に立ってんだ。お前にどうやらこつやら言われる筋合いはない！」

「だったら、食らっとけ！正義の鉄拳！！」

黄金追撃！！

ズガズガズガズガズガズガズガズガズガ

「ぐ・・・ぞあ・・・！」

ベンケイは白目を剥いて倒れたのだった、が・・・。

「ま、マジで・・・か・・・！？」

同時に、俺も、倒れてしまった。

「どうしたんだよ！キーン！」

僕はキーンに駆け寄る。
そして、ホイミをかけた。

「あ、あいつ……。俺が攻撃をした瞬間、カウンターしてきよった。やっぱ、あいつはなかなかやるんや」

しかし、その「あいつ」は、今、さっき連れてきた侍によって御用になっている。

「でも、今まで、迷惑をかけていたには違いない。だから、この国の罪を受けるべきだな」

僕らもついていくことに決めたのだった。

「あ……。えつとお。被告人ベンケイのお、罪は、橋を、独占して、渡らせなかったことによる、えと、えと、なんらかの罰である。で、これに対する判決としては、今後一ヶ月の、橋の近くの清掃活動？ だっけか、なんかをしなさいよ」

オダ王国第15代国王、ノブナーガ3世による、判決？ が言い渡された。

そのあと、ベンケイは心を入れ換えたらしく、この国の兵士として暮らすらしい。

なかなかの力で、すぐに大佐の座をもらったらしい。

僕らはこの国の武器を買うことにした。

大剣豪の剣・・3000G

旅人の服・・100G

ウエスギの弓・・1500G

鋼の鎧・兜・こて・靴・・30000G

これだけ買っても、ノブナーガ3世にもらったお金は、尽きることをしらなかった。

だからちよつと調子にのって、

特やくそう

賢者の清水

を買った。

ちよく金持ちみたいな気分を味わったあと、ベンケイが封じていた橋を渡り、次なる町へいくことにしたのだった。

金の再戦闘（後書き）

ノブナーガ3世の口調は、気にしないでください！

あと、全国の織田・小田・尾田など、「オダ」と読む名字の人、本
当にごめんなさいm（ー）m

っていうか、作者名にも尾田って書いてある・・・（爆）

古の村

オダ王国の領土から抜けて、しばらくしたところに、その村があった。

しかし、人の気配がしない。

というよりか、酷く、その村は寂れていた。

大昔にでも滅びてしまったのだろうか。

「な〜んていうか……。いや〜な感じの村〜」

「雰囲気嫌いだな……」

暗く、呪われたような、妙な静けさが、僕らを不安にさせていった。

カチャッ

カチャッ

カチャッ

カチャッ

突然、足音が聞こえる。

それも、なにか、金属的な音で……。

「な、なんか……。近づいてくる……。ぞ……。?」

「な、なんかつてなんや……。お前後ろ向いて確かめや」

「なんで僕なんだ。そっちがやりやあいいだろが!」

「いいじゃん!そっちがやってくれたって!」

あれ?っていかもしかして……。?お前、まさか怖いんちゃうやろな?」

「……!（ギクッ）。口……。い、いや〜、そ、そんなことはないよ〜（汗）」

「なに言つとんねん。えらい脂汗出とんで？」

「そーいうお前だつて、さっきから足がカクカク動いてるぜ？」

「は？（汗）はああ？（汗）こここここれはあ・・・むっ、武者震いやつて！」

「武者震い・・・？」

「そそそそそーやわ！なにをチラチラ見とんねん！」

「わかつたよ！もうわかつた！！二人同時に見るぞ！3！2！1！はいっ！」

「ぎゃあああああああああああ！！！」

そこにいたのは・・・。

骸骨戦士だった。

骸骨が鎧を背負つて、ガシャガシャと歩いてくるのだ。

もちろん、僕とキーンは顔を見合わせて猛ダッシュで逃げた。

これは夢！夢だ！そう信じて・・・。

しばらく走っていると、一際大きな建物を見つけました。

「はあ・・・はあ・・・きよ、教会？」

「ぼいな・・・」

そこは確かに、教会に使われる、金の口ザリオが飾られている、立派な教会だった。

教会のなかに人はいるのだろうか？

いたらない・・・。

槍を使う、死を超越した骨身の戦士。

力もそこそこありながら、力や守備を落としながらの攻撃が得意だ。

「こ、こうなったら、戦わないと・・・！」

「仕方がないよな・・・ちよい怖いけど」

「ケケケケケケ」

やっばい村に来ちまったなあ・・・。

古の村での戦闘

先制してきたのはホーリーランスのほうだった。
連続的に突いていく。

シュッ

シュッ

シュッ

シュッ

シュッ

その突いた攻撃を、何回もかわしていった。

「くらえっ！」

魔法剣メラ斬り！

剣で切りかかる。

それらを、簡単にかわしてしまふ。

「カカカカッ！」

メラを放ってきた。

いや、それはメラよりも遥かに強力だ。

「メラミだ！」

メラ斬りですら、その剣には太刀打ちできず、僕らは吹っ飛んだ。

ホーリーランスって、メラ系の呪文、使えたっけ・・・？

ホーリーランスは、槍を使った、巧みな戦法を使ってきた。
下手すりゃ、僕のお祖父さんよりもうまい。

「カカカカッ！」

ドガッ！！

爆発を起こす。

イオであることがわかる。

「こ、こいつ、もしかして・・・」

「ああ。ただのホーリーランスじゃない・・・！」

ホーリーランスは、また、槍による総攻撃。

僕らは剣と鉈を上手い具合に利用するも、なかなか強力だ。
一切当たらない。

キン

キン

キン

キン

キン

キン

カンカンカンカン

ガキイイイイイ

シュ！

シュシュシュシュシュ！

シュシュシュシュシュシュ！

ザシィィィ

技の壮絶な流し合いだった。

攻撃は巧みにかわされ、再び自分の攻めへ回る。

突きで攻撃する槍は、戦い面においては、遠距離攻撃なら、圧倒的に優位に立つ。

リーチの短い剣や斧の類いでは、攻撃を当てることすら、ままならないのだ。

かといって、相当な槍使いは、隙が出ない。

どんなに頑張ったって、間合いを詰めていくことがほぼ、できない状態にあった。

槍ってこんな強力な武器だったか？

ってくらい強い。

無論、あのホーリーランスは鍛え上げられすぎている。

この強さは、他の魔物にはない。

突きの攻撃は、スピードをあげていく。

僕らも、かわすのがやっとで、攻めに回るなど出来やしなかった。

ビュン

ビュン

ビュン

ビュン

ビュン

ズシャッ・・・

「き、キーン!？」

「が・・・っはあ・・・!」

キーンの腹には、見事に貫かれた槍が、血にまみれている。
キーンは背中から、ドシツとたおれ、そのまま、目をぱちりと開けたまま、なにかうわ言のように、呻き声をあげていた。

「う・・・おお・・・ああ・・・」

なにか、恐ろしい夢でも見ているようだ。
キーンを倒したホーリーランスは、無論、ターゲットを、僕に写してきた。

(こ、このままじゃ・・・やられる・・・)

恐怖に一步步、僕は退いていく。
ホーリーランスも、真っ直ぐに標準をかまえ、すぐにでも、突く用意は出来ている。

メラ!!

火炎呪文をやつにかけてみた。
さすがに火炎は、効いているはず。
これが効かなきゃ、本当に打つ手はない。

なのに、

「カーッカカッ」

体の力を抜き、いつきに放出する。

すると、さっきまでのメラは一瞬にして魔法力を失い、その姿を消した。

「うあ・・・ま、マジでか・・・」

さっきの技は、不撓不屈。

熟練した武闘家が、自らに纏ってしまった悪い効果を、一瞬にして消す。

そんな技まで、やつは身につけていた。

こりゃ、ただの兵士の屍ではなさそうだ。

シュンシュン

カンツカンツ

ブオンブオン

ギイイイン

シュシュシュ

カンカンカン

ビュンツ

キイイン

槍と剣は、想像を絶するほどの力で、ぶつかっていた。

しかし、やはり、槍のほうが一枚、上手のようだ……。

「勝て……ないっ」

「カカカカカ」

俺、大丈夫かよ……。

さっき、ホーリーランスの一撃が、腹に突き刺さった。

血がどくどくと流れていつているのを見ると、なんとか生きているようだ。

この血のせいで、ほとんど全身の感覚がない。

頭もぼうつとして、意識もたまに、ぷつつと切れる。

あまり無理して動くと、大事に至る。

たしか、バックのなかに、やくそうが大量に入っているはずだ。

しかし、いくら食べても、やはり急速に回復するわけではない。

もし今、すぐ近くで戦っているホーリーランスが俺に気づいた場合、真っ先にとどめをさしにくるだろう。

そんな場合、半死人の俺は、本当に命の危険にさらされる。

気配を消して、こっそりと、村のどこかに避難しよう。

僕は、少し押されはしているが、まだ、なんとか持ちこたえてはいるようだ。

やつのような骨のモンスターは、魔王などの魔力や、または人などが出ず、負のオーラを命の源としている。

だから、体力などという、普通の人間にあるものが、やつにはない。やつらのような魔物を倒すのは、粉々に破壊するか、正のオーラや勝まさりののオーラでやつを攻撃するしかない。

正のオーラというのは、正しい心、特に熟練した勇者などが持つている、正義に徹する気持ちが出すオーラのことだ。

また、勝まさりののオーラは、伝説の勇者、ムーン家だけが持つオーラのことらしいが、そんなものはただの伝説に違いない。

正のオーラで攻撃するなら、僕にだって出来る！

僕は、イメージする。

誰かを守りたい！

誰かを、守るんだ！

ヒウウウウウウウウウ

腕に、光輝く金色のオーラが現れた。

すうつと、僕の腕に纏っていく。

それと共に、何か、力がみなぎってきた。

「よし・・・これでなら、勝てるかもな！」

「カカカツ！」

シンシンシンシン

ビュッ！

キン

ビビッ！

バキィィィ

やつの右手が、僕の剣によって、ぶつたぎられた。
もちろん、骨身なので、血が出たりはしなかった。

「ギアアアッ！」

今だ！

魔法剣メラ斬り！！

ドガアアアアアン・・・

古の村での戦闘（後書き）

新しい技？といいますが、設定が作られました。
一応表記、説明をします。

正のオーラ

（せいのオーラ）

正義の心を持つものの精神が、魔法力として伝わり、力のみならず、なぎつた闘気の種類。勇者が持つことが出来る。

勝のオーラ

（まさりのオーラ）

伝説の勇者の家系である、ムーン家の者が持つことが出来るオーラ。

負のオーラ

（ふのオーラ）

悪の心によって作られるオーラ

古の村での逃避

僕が正のオーラを用いて放った魔法剣は、見事にホーリーランスを切り裂いていた。

「とっさに正のオーラが出てくれた。これが勝因だったみたいだな」

「な・・・まさか。あの状況から、あの力が出せるなんて。オーラの話なら聞いたこともある。

正義の心だけが、心に貫かれている状態じゃないと発動できないとも、聞いたことがある。

あいつの心は、さっき、恐怖から一新にして解き払い、勇気の心に変化していたんだ。

すごい。すごすぎる・・・！」

キーンは、モローをあまりにも強力な力があると見抜いたのだった。

僕たちは、この村にある、できるだけ見つかりにくい、家で休むことにした。

どうやらこの村には、さっきのようなホーリーランスを中心に、たくさん魔物が存在しているようだった。

腐った死体、骸骨兵、死神兵、ナイトリッチ、ナイトキング、ワイトキングなどと、ゾンビ系のモンスターばかりが大量に潜んでいる。普通、ゾンビ系のモンスターが町を蔓延るなどということは、絶対にありえないことだ。

負のオーラを纏うはずのゾンビ系は、正のオーラには対極の性質を持つのだ。

正しき心を身に付けた戦士や、勇者、兵士、人さえいれば、やつらを倒すことは可能だったはず。

なのに、やつらは蔓延っている。

どうして、こんな村に変化したのか……。

「そーいや。この村、何て名前だったっけ？」

「フィンズ村って名前だったような？」

「フィンズ？本当にそんな名前だったか？」

「確かな。村の看板に書かれてたからね」

いや、そんな名前の村は、いままで見た、どんな世界地図にも記されていないかった。

この世界に、国は多く存在しない。

村は割りと多いだろうが、この村、「フィンズ」という名前は聞いたことがなかった。

「フィンズ……？本当にそんな文字だったのか？どこか掠れてたりとか？」

「っていうか、看板自体が壊れていて、って文字しか見えなかったからな」

そういえば、昔聞いたことがあった。

かつて、名を馳せた盗賊たちが、自分達の村を作りあげた伝説を。

その村は、やがて、そのときに長を勤めていた盗賊団長、アルフネイリスという名をとって、アルフィンス村と名付けられた。

「もしかしてさ、壊れた看板の、本当に書かれていた文字ってさ、フィンズじゃなくって、アルフィンスじゃないのかな？」

「ああ。なんか俺もそんなような気がさっきからしてんだよ」

「そういえば、30年くらい前に、この地方一体で大飢饉があったって聞いたことがある気が」

大飢饉が起きたのは、紛れもない事実。

ここがもし、アルフィンス村だとしたら、盗賊の一族の子孫が暮らすはずだ。

だったら、誰も正のオーラを持つはずない。

盗賊など、悪徳な民族であることに違いはないのだから。

さらに、そこへ大飢饉が襲ってきた。

人々はみるみるうちに暴徒と化し、少ない食料を奪い合っていた。やがて、飢餓が起こり、人々はみるみるうちに死んでいった。

やがて、その死した骨には負のオーラが宿り、骸骨兵になったのだ。

きつとこんな昔話があったのだろう。

たまったもんじゃないことね、こっちは。

今のうちに、なんとか、骸骨兵たちの間を通り抜け、逃げるしかない。

「よしっ。だいぶ傷も収まってきたようだな」

「ああ。じゃ、そろそろ逃げる準備だぜ」

「おう」

骸骨兵は、さつきからその辺りをうろろしている。

さつき倒した、ホーリーランスは、倒れてしまっているが、それ以外の魔物が大量にいるのだ。

こいつら一人一人を相手になぞしていれば、きつと面倒な目にあっているだろう。

こんなときは逃げるが勝ち！戦略的撤退だ。

「よし。今から、3、2、1でダッシュな」

「途中で何が出てきてもやな」

「ああ。どうしてもおいかけてくるやつがいたら、多少の攻撃はしかけてもいいけど、絶対あからさまな戦闘だけはするなよ？勝てっこないんだからよ」

「わかつとるわ」

3

2

1

ダッシュ！！

いっぽうそのころ、アルフィンス村のとある一角でのことだ。

「族長！」

「なんだ。騒々しい」

「さきほど、將軍ホーリーランス様の遺体を発見！修復なさいますか？」

「なに？ホーリーランスが！？何者だ、そいつは」

「わかりません。が、相当の実力であることには間違いはないでしょう」

「なるほど。やつ（ホーリーランス）には、我が最高級の負のオーラを挿入してやった。ほぼ無尽蔵に近い、やつを打ち倒すとは。もしかすると、勝のオーラまさりのオーラの使い手かもな」

「ええ！？ま、まさか、ムーン家一族とでも！？」

「かもしれん。はははははっ！おもしろいじゃないか！そうだ！我が族長、自ら出陣するとするか！」

「ははっ！」

「お前はここで待機しておけ！」

怪しげな、影の動き。

はたして、どうなる？次回！！

古の村と少女

僕は即座に逃げていく。
しかし、

「き、気づかれた!？」

後ろから、腐った死体数体に見つかるといふ事態が起きたのだった。

「ゲゲゲゲゲ」

不気味な笑い声をあげて、ゆっくりと近づいてくる。
そこまで遅くはないので、すぐに逃げる事ができた。
と、勝手に思い込んでいた。

「や、やっべえ・・・!ま、前からも来てるぞ!」

前からも、腐った死体がうようよと近づく。
そのなかには、幽霊や死神など、もっと恐怖が多い魔物もいる。

「た、戦うか・・・？」

「いやいや。この数でか!？」

「んなこといっても、このままあいつらの仲間になっちまうのでいいのかよ・・・!」

徐々に双方は距離を僕らに詰めてくる。
そろそろ二人がほとんど場所を失いかけていた。

「ダメだ。やっぱり戦うぞ！いくぞ！レジェンドチーム！」

4 連続メラー！！

ドラゴスライム、スライムつむり、メタルスライム、僕の四人によるメラ。

下手したらメラミやメラゾーマなどをも越えるかもしれない技を繰り出した。

するとどうか、腐った死体や、骸骨兵などという輩はすぐに一掃していく。

「よしつ。敵減った！逃げるぞおー！！」

再び逃げる。

逃げて逃げて、逃げまくる。

なのに、幽霊たちが空を舞って追ってくる。

やつらには、剣で対抗をしていくが、決して戦いといえるものじゃない。

逃亡戦である。

それなのに、トラブルが起きたのだ・・・。

「おかあさああん！おかあさああん！ここどこおー！？」

一人の小さな女の子が、お母さんと呼んで、この村をとことこと歩いていた。

「な、なんでこんなとこに人が！？」

「とにかく助けやんと」

「おかあさああん！！どこおおー！」

「こっちおいで！」

その子は、十歳くらいの女の子で、心配で目は半分潤っていた。

女の子は、上目使いでついさっき現れた、少年二人を見た。

その表情は確かに可愛かった。

「お母さんの場所、知ってるの？」

「それは知らないけど、ここには強い魔物がいっぱいいる。だから、逃げるんだ！この村から離れる！」

女の子をなんとか説得させようと試みる。

決して、ナンパなどという、浮かれた気持ちなんてないんだ。

ただ、命を救いたい。

まだ芽も顔を出していない、あどけない命をここで途絶えさせてはいけない。

でも、そんな意思に反して、マミーが彼女の後ろから襲ってきた。と、いうよりか、地面から這い出てきたのだ。

「きゃあっ！！！」

女の子の足を、そいつは掴み、地面に引きずりこもうとしていく。彼女は少しだが、足が引きずりこまれていった。

「きゃあああああ！」

彼女が泣き叫ぶ。

それと共に、どんどん地中へ引きずり込まれていった。

僕は、彼女の腕をがちりと掴み、引っ張った。

「く・・・くそ・・・おお・・・！」

「助けて！お願い！」

ズズッ

ズズズズッ

ズズッ

ズズズズズッ

ズズズッ

僕の意識とは逆に、どんどんと沈む。

ぐいぐいと、真下に。

今みると、足は膝くらいにまで埋まってしまっている。

結構、マミーの力は強い。

「仕方がない。マミーの力にはとても勝てそうにないな。よし。キーン。ちよつとでもいいから、マミーが土に沈めるスピードを緩ませてくれ！いい考えがあるんだ」

僕は女の子の腕をキーンが掴んだと確認し、剣に手を置き換えた。

「地中に沈めてるなら、マミーは必ず、女の子の足の近くにいます。腕を使わなくちゃいけないから、マミーの腕の長さが範囲内。つまり、半径は１メートルにも満たない！」

正のオーラを腕に纏っていく。

やがてそれは、剣にまで伝わっていった。

女の子も、はじめは腕と剣が光っているのを見て、不思議そうに見

ていたが、途端に安心した顔になった。

「覚悟しろ！マミー」

剣を高く振り上げ、地面に突き落とした。

すると、正のオーラは稲妻のように、地面に落ちていった。それと同時に、

「ギヤアアアアアアアアアアアア！」

断末魔の叫びが聞こえたのだ。

その声が聞こえると同時に、キーンは明らかな勝利を知った。

女の子は、腰辺りまで埋まってしまっではいたが、なんとか救出できたのだった。

古の村と少女（後書き）

なんか、何かを纏って地面に突き刺すって、前作でもやった気が。

人買いに売られた少女（前書き）

人身売買をするシーンが見られます。（性的・卑猥なことはしません）

嫌な方はこの回を飛ばして見たほうがよいかも知れません。

人買いに売られた少女

「ん．．．んんっ！」

少女は目を覚ました。

そこは、とある村の宿屋。

「おっ。起きたか」

起きていたのは、最後に少女を引っ張りあげた、俺^{キーン}だ。

「昨日は悪かったな。なんか巻き込んだって」

「いいえ。おかげで、あの怖い村から抜け出してこれたんですし」

少女は手を振って俺のいうことに否定した。

「そーいや。昨日は疲れてて聞けなかったけど、あんた、なんであんなところにおったんや？」

「実は．．．う、うぐっ！！」

少女は涙を流してしまった。

「え！？お、俺．．．、なんか悪いこと言ったか．．．！？」

「い、いえ。そういうのじゃなくて．．．」

「女の子を泣かしちゃダメだろ！」

タイミング悪いな！

なんでそんな丁度のタイミングで起きるの!?

どうして、あの子が泣き出したのか、それは、彼女から喋ってくれた。

「あたし実は……。捨てられたみたいなんです……」
「は？」

その子が話してくれたのは、壮絶な話だった――

彼女の名前は、ミカ。

ここから少し遠くの村に住んでいた。
優しい両親に見守られ、スクスクと平和に暮らしていた。

ある日、母親と二人で、隣町まで買い物にいき、帰っていたときのことだった。

「待て……!」

そこには、たくさんの力強そうな男性がサーベルを構えていた。
格好などからして、いかにも盗賊団のようだった。

「お前たち、無事にここを通りたければ、荷物や衣服を全部おいていきな!」

「・・・衣服は無理ですが、荷物なら差し上げます！だから、ここを通してください！」

母親は勇敢な人で、そう盗賊たちに懇願した。

「無理だ。すべてよこせ！女子供じゃ何もできんだろ。さつさとよこせ！」

少女と母親に、盗賊数人が襲いかかった。
荷物を奪うためだ。

「おほっ！よく見たら、その女の子、可愛いつすね」

それは、少女を明らかにハレンチな目で見る。

「なるほど。確かに美形な顔立ちだな。どっかの人買いにでも売り飛ばせば、結構な金になりそうだな」

少女には、明らかな恐怖が浮かんだ。

「へへへ。この荷物は返すぜ。明らかにもつと大金になりそうなモノがあつたんでな！」

そういうと、盗賊は、さっきの荷物を母親へ向かって投げ飛ばし、かわりに少女を連れ去った。

「おかあさああん！！」

にげられると困るので、少女には鎖がつけられた。
首、腕、足。

また、うるさくされると嫌だというので、口に布を押し込まれた。

「じゃ、しばらくこのままで待つてな。可哀想な姫ちゃん!!」

彼女は、不安と恐怖で答えられなかったという。

やがて、人買いが姿を現した。

盗賊団の面々にお金を払い、少女を無理矢理に連れ去っていった。
少女は、食事も満足に与えられなかったため、ろくな抵抗もすることができずに、人買いのいいなりになって連れてかれた。

「へへへっ。余計な手間まで省けて助かったぜ」

「.....」

「まあまあ。お前も不幸だな!これからは、奴隷として明るい未来が待つてるぜ!はっはっはっは!」

無視してはいたが、自然とこぼれる涙を抑えることは無理だった。
人買いに売られ、これからは別の場所に売られていく。

見世物にされるかも知れないし、どこかの国の奴隷にされてしまうかもしれない。

しかし、さらに恐ろしいことが起きた。

アルフィネス村という、今は滅んだ、小さな村を通ったときだった。
とつぜん魔物が襲ってきた。

「グアアアアア!!」

人買いは、そいつに倒された。

残ったのは、少女だけ。

そのとき、俺たちがやってきた。

それを見ると、魔物はこっちに集中したため、少女は助かった。

そうして、今に至る。

「へえ・・・そりゃあ、大変だったんだな」

「はい。でも、もう、家もどこかわからないし」

「次さ、僕らは別の国に旅立つつもりでいるけど、一緒にいくかい？ 一人の女の子が、ずっとこの先にいくのは、きっと大変だろうし。僕ら、自分でいうのもなんだけど、多少は鍛えたつもりだから、みんなで行動したほうが絶対にいいしさ」

しかし、少女は困っていた。

「でも・・・あたしなんかが一緒にいて、迷惑にならない？それが心配・・・」

「大丈夫さ。迷惑になんか、なるもんか」

俺もモロも、そういつて彼女を引き込む。

やがて、はじめは悩んでいるように見えた彼女も、

「よろしくお願いします」

といって、笑顔を見せた。

新しい仲間、ミ力を加えた僕らの旅は、まだまだ続く。

偽勇者と少女

そこは、港町。

結構活気がある。

人もそこそこ多くいて、お店などもずらっと並べられていた。

「よし。今日はこの辺りで休むか。宿屋を探して、予約しておいて、その後に自由時間にしよう。ミカ。どこか行きたいところあるか？」

「え？いいんですか？」

「当たり前だろ？もう、君も僕らの仲間だからね」

僕はミカと一緒に、どこかに出掛けてみようと思う。

彼女が心配だ。

まだ、十歳の小さな子供だからだ。

「じゃ、俺は村の外にいる魔物と戦って、稽古でもするか」

キーンはそう言って、村の外に出てしまったのだった。

僕らは、しばし、外にある店を探索した。

やはり少女なだけあって、アクセサリー店や、洋服店などが多かったが、時には冗談などもいつて笑いあった。

ミカも僕も、本当に楽しかった。

途中で起きた、意味のわからないトラブルを除いては。

それは、洋服店に入ったときだった。

女の子用の可愛いドレスや、カチューシャなどを選んでいた。

決して買ってとは言わなかったけど、とても楽しそうに笑っていた。

買ってやればいいじゃんって言いますけれども、ミカが選んだドレス、10万ゴールド。

高いっすわ。

さすがにそれを買う勇氣は僕にはなかった。

買ったらたぶん、僕ら今日、野宿必至だ。

それはさすがに勘弁してほしい。

十歳ながら、僕らの懷事情を理解してくれるとは。

でも、さすがになにも買ってあげないのは可哀想な気がしたので、選んでいた中であつた、カチューシャを買ってあげた。

「あ、ありがとう・・・」

「気にすんな。仲間なんだから、欲しいものは欲しいっていつてくれていいんだよ（ドレスは高いけど）」

そういうと、ミカは笑顔を見せてくれた。

思えば、ベンケイ事件や、アルフィンス村事件があつてから、あまり笑っていなかった気がする。

昔はもう少しよく笑ってた気がするが、最近命からがらの事件が多かったから。

僕らは今を、とても楽しんでいた。

「オラオラ！勇者様のお通りだぞ〜！」

大量の人だかりがいる、真ん中で、皆にひざまずかせている、四人

の大人がいた。

「ゆ、勇者様だ！」

「世界の英雄だ！」

とかなんとかいって、もり立てている人たちもいる。

どうやら、彼は、勇者らしい。

マントがついた、鮮やかな布の服を身に纏い、繊細な装飾を身に付けた剣をつけている。

盾は、キラキラと白く輝いていて、どんなものでも跳ね返せそうだ。

「あれが・・・勇者か」

「な〜んか、ただの柄の悪いおじさんに見えるのは、あたしだけですかね？」

そう、柄が悪かったのだ。

彼らは、俺たちは勇者だと言わんばかりに、大きな顔をして町を歩いていた。

町の人も、勇者様だから敬うのは当たり前だと思っっているらしく、頭を下げていた。

「ん！？なんだよお前ら」

その勇者たちは、僕たちの目の前に現れたのだ。

町の人たちはみんな頭を下げているのに、僕らがそれに反しているからだろう。

「なんですか？」

「俺たちは、かの有名な勇者一行だぞ！？敬意を払え、敬意を！頭が高いんだよガキが！！」

それにむつとしたのか、ミカは言い返した。

「それが勇者の吐く言葉ですか？信じられません！モローさん！行きましよう！！」

僕よりさきに、ミカが怒って、踵を返し、宿屋に帰ろうとした。

「待て小娘！！てめえ、誰のおかげで世界が平和になったと思ってやがんだよ！！生意気な口聞いてんじゃねえ！！」

勇者はさつきから、世界の平和を救ったとは、とても思えない暴言をはき続けていた。

さすがにこいつらが勇者なわけではない。

町の人誰もが、ようやくそれに気がつきはじめた。

「まだただのガキンチョのくせして、生意気な口聞いてんじゃねえぞ！！」

「ふんっ！」

ミカはすたすたと歩き出す。

「とまれつつつてんだよ！！」

勇者は、ミカのところまで走った。

そして勇者は、剣を取り出す。

「どうやったらこんな生意気なガキが生まれるんだ！？ちつと大人の怖さを教えておいてやる！」

勇者は、剣をミカの頬につける。

「ちつと体で教えてやらねえとわかんないみたいだな！」

「おい！やめろ！偽勇者！！」

「おつと彼氏！動かないほうがいいぜ！動いたら、彼女の頬に傷つくぜ。ダメだよなあ。彼氏は彼女のこと守ってやんないとな。」

とりあえず、彼女を離してほしければ、ひざまずけ！ひざまずいて詫びろ！これが俺に対する謝罪だ！！」

「てめえ……。そんなやつが今までよく勇者だなんて名乗れたもんだな。つざけやがつて！」

しかし、ミカを傷つけるわけにはいかない。
僕は膝をついた。

こんなやろくに屈するのは、嫌だけど、背に腹は変えられないのだ。

「ひひひひ」

後ろで、たぶん遊び人だろう。

やつが笑っていた。

鞭を僕の背中に何発が打ち付けたが、やがて笑っていた。
武闘家と僧侶も、にやにや笑って僕のことを見ている。
本当にふざけやがつて！僕は、頭を下げて土下座した。

「うぐ……。ひっ……。ひっ……。！」

前では、女の子の泣き声がする。
たぶん、ミカの声だ。

「あー！これだから子供は嫌いだぜー。お前が悪いんだろう！お前が俺に対して逆らったからいけないんだ」

「うう・・・ううう・・・」

「へへへ。泣いてんじゃねえっ！！」

勇者は、たぶん、ミカの顔を無理矢理、泣いて俯いているのを、上におしあげた。
すると・・・。

「う・・・す、すいませんでしたあ・・・！」

勇者はあとずさった。

僕の後ろにいる僧侶たちは、なにが起きたかはわからなかったが、勇者は明らかに戦意喪失といった具合になっていた。

やがて、勇者が慌てて逃げていくのに追って、仲間たちも逃げていくのだった。

僕らの周りで、事の経緯を見ていた人たちも、なにが起きていたかはわからなかったらしく、ミカも勇者が急に怯えてしまっただけならしく、なにも知らないという。

「あのときいったい、なにがあっただんだ？」

女王の国、ヤマタイ国（前書き）

場所は・・・秘密です。

女王の国、ヤマタイ国

次に向かったのは、とある都市国家だ。

この国の名前は、ヤマタイ国という名前だ。

歴代から、女性の国王が治めている国らしい。

男性がこの国を治めようとすると、毎度のごとく、なにか危険なことがおきるらしい。

前にこの国を修めた男性国王の時代では、大飢饉がおきたらしい。

「で、この国で何をするの？」

「いや。特にこれといったことをするつもりはないよ。なんだったら、もつと先に進んでもいいんだけど」

「いや、やめておこ。この先に行くには、三日に一回出る船に乗って、海の向こうに行かんとあかんねん。で、その船がちょうど、昨日出たばかりなんやってよ。あと二日は待たんとな」

僕は仕方がないので、その辺の魔物を倒して、力量を上げるトレーニングをした。

おかげで、新しく、デインとメラミを覚えられた。

ミカとキーンは、何やら二人で買い物にでもいったらしい。

「キーンがミカと買い物にいくなんて、珍しいこともあるもんだなあ」

「そうですね。キーンさんって、こういうことするの、苦手そうなのに」

「っさいな！でも、モローみたいな、兄弟とかカップルで行くような買い物とちゃうからな」

「じゃあ、何買いにいったんだよ？」

「護身用の武器です。キーンさんに前のことを話したら、護身用に何か買えって言われましたから。意外と楽しかったですよ」

ミカの腰には、確かに短剣が添えられている。

今時、旅をするなら、それくらいの覚悟が必要だしな。

「でも、まだ日没まで時間があるな」

「そういや、この国は今日と明日、祭りをするらしいからな。いつてみるか」

祭りとは、四季に行われる、神様を祀るお祭りらしい。

それぞれの季節にあわせて、躍りや音楽、出される食べ物なども変わるらしい。

どれも、この国で採れた世界でも珍しい食品ばかりだ。

この祭りを、三人で堪能した。

文化が違う国のことを学ぶのも、冒険の楽しみのひとつだ。そして、僕らは、運がよかった。

「女王ヒミコさま、御成り～～～！」

このお祭りでは、女王自らも出向くのがしきたりらしい。

大勢の使用人や防衛の列の中心に、女王ヒミコという人物が、非常に綺麗な化粧、服を着て、ゆつくりと歩いていた。

「すっげえな。女王を見たよ、僕」

「俺もや」

「あたしも！」

女王はそのあと、とんでもないことをした。

「行列をお止めなさい」

女王の言葉が出た途端、行列はゆつくりとまった。

女王はゆつくりと僕らの方へ歩いてくる。

衛士の人々が、女王を保護しようとしたが、女王本人がそれを拒否した。

「あなた方は、旅をしていらつしやいますね」

「え！？な、なんでわかるんですか？」

「ふふ。私は鬼道、つまりは占いを最も得意としています。この程度は占いでわかります。そしてあなた方は、世界を守ってくださいます。占いでは、未来の予知を行えます。あなた方は世界を救います。が、あなた方の仲間の一人、誰かが、裏切ります。誰か、とは、あえて言いませんが。未来とは、運命ではない。変えることができる。運命には逆らえませんが、未来、つまり、時間の流れは変えられるのです。裏切るのは、運命なのか、ただの未来の出来事なのか。あなた方が、旅でそれを知ってください。私は、あなた方を応援しています。」

この祭りが終わる、二日後、私の屋敷においでください。おもてなしがしたいのです。未来の勇者さま方に」

そういうと、再び、女王ヒミコさまは行列に戻り、ゆっくりと歩き出した。

「な、なんだっただ・・・？」

突然の出来事から、なにも言えなかった僕たちだったが、女王さまのいう通りに、二日後、屋敷に向かっていった。

「ミミ」のせい

二日後の屋敷内。

そこは、特に必要なものをおかず、ガランとした部屋だった。その中心に、ローマの絨毯を敷き、ヒミコが座っている。

「一昨日は、突然な話をしてしまいまして、すみませんでした」

「ま、まあ、少しびつくりしましたが・・・」

「ほんで、今日はなんで呼びなさったんですか？」

「実は、私は、あなた方と共に、世界を救いたいのです」

ヒミコは、そういうと、紙を一枚、僕たちに見せてくれた。

そこには、青く塗られている部分と、緑で塗られている部分があった。

これはこの世界の地図だ。

「私たちが住んでいるのは、この6つある大陸のなかで一番大きな大陸である、ユーラン大陸の極東です。この、小さな島に、オダ王国、ヤマタイ国、そして、ヤマト帝国の三つがあります。

そして、その少し西へ行きますと、ヤマト帝国が侵略したカラ連合国、そしてシラギ帝国、ヤマト帝国と協定を結んでいるクダラ王国、さらにそこから北へ進むと、コウクリ王国があります。さらに北へ進むと、遊牧民族である人々が、シン帝国と呼ばれる国をつくっております。さらに今度は南西へ進みますと、世界の中心ともいえる国、トウ帝国がごいます。この国には、世界のあちらこちらから、たくさんの品物が行き来しているのです。

そしてこの、トウ帝国の北側に、問題の国があるのです」

すると、トウ帝国と呼ばれる国の、西側と北側にある、大きな砂漠を指差して、ヒミコは続けた。

「この膨大な砂漠に、非常に巨大な国があるのです。その国の名前は、大モーコ王国。青き狼の子孫と呼ばれる一族の長がしきる、遊牧民族の国です。この国が、あちらこちらの国々を制圧しているのです。北は、東ローマから、西はトウ帝国まで、かなりの領地を広げているのです」

そして今度は、何やら人物画を一枚取り出した。

「彼の名前が、大モーコ王国の皇帝、ゼストと言います。この絵が、まだ、皇帝になる、前のものです。そして、次の絵をご覧ください」

「！！！」

その絵をみて、僕は氷ついた。

先程、前に見せてもらった絵では、国のために全力をつくす、いい総裁のような格好をしていたのに対して、皇帝のときには、それは酷い変わりようだった。

目は鋭く何者も寄せ付けないおぞましさを感じた。

体全体をみても、何やら想像を絶するような悪意を感じる。

ただの絵なのに、あまりにも凶悪だ。

「この変化は、ただの身体の変化ではありません。彼から、多大で非常におぞましい、負のオーラを感じます。彼には、きっと、なにが隠された、恐ろしいことがある気がするのです」

ヒミコはそう言って、それらを全て片付けた。

「あなたは、特別な力があるような感じがいたします。私はいつも、占いをしています。そこで最近、いつも占いに出るのです。『正しき魂を持つ、伝説の勇者、現れる』と。そして、それがあなたなのです。世界を、救ってほしいのです」

熱い話を聞かされたあと、僕は呆然と立ち尽くした。

そんなすごい才能が僕にあるとは思えない。

だって僕はいたって普通なんだ。

普通に生まれ、普通に暮らしていた。

いや？本当にそうなのだろうか？

僕の出生については、お祖母さんに聞いた。

桃から生まれた、神様から授かった子供だと言われた。

そうか。

僕は普通の人間じゃなかったんだ。

「もしも・・・僕にそんな力があるんなら・・・それを世界にいかすのも・・・悪くないな」

僕はわかった。

世界を救うために、勇者として、生まれるために、桃から生まれたんだ。

普通と違うんだ。

僕は。

だから、世界を救うほどの不思議な力まで持てたんだ。

「私も、できるかぎりサポートします」

そういつて、三日月の紋章が入った、不思議な鎧を持ってきた。鎧全体に、まるで月の光のような、優しい光が発されている。

「これは、先代のムーニー族の勇者である者が、そこに勝のオーラ^{まさりのオーラ}を込め、聖なる力を纏わせた、伝説の鎧です」

僕は迷わずにそれを身に付けた。

光輝く三日月の印がついている、ティアラ型の兜をかぶる。

そして、白を基調とした、マント付きの鎧を着た。

そして、さらに白を基調とした籠手、ブーツを履いた。

さらに、満月の剣を身につけた。

「その剣は、普通では一切斬れません。勝のオーラ^{まさりのオーラ}の強さによって、切れ味が変わるらしいです」

「へえ。満月の剣か」

その剣をまじまじと見つめた。

その剣には、確かに月のような、神秘的な何かがあった。

僕、いつのまにか、伝説の勇者になってるよ……（……）

トミコの占い（後書き）

国の名前とか、主人公の設定など、変化、付け足しが多すぎましたが、ご了承ください。

国名は、それぞれそのまま出しました。

時代がバラバラですが、その辺りはノリで！

今まで主人公は正のオーラだといっていました、それが勝のオーラのことです。

ユーラン大陸に上陸

いや〜。

勇者でした〜。

今までただの旅人だったのに〜。

勇者になっちゃいました〜。

すげえな〜。

いつのまにか勇者になりました。

どうやら、大モーク王国っていう国を滅ぼさないとイケないらしい。

って、え!?

国を滅ぼせと・・・!?

魔王くらいならまだ倒せるかも知れないけど、国単位ですか？

それは無茶ではあるまいか・・・？

とは言いましたけど、もう倒すしかしょうがない。

無理したってどうしようもない。

だって今、ヤマタイ国から外に出て、カラ連合国に行くことになり、

船で移動中だ。

カラ連合国とクダラ王国とシラギ帝国には、大モーク王国の影響を

もろ受けているらしい。

カラ連合国についてはじめに向かった村は、港町だ。

しかし、さっきのヤマタイ国と違い、とてつもなく寂れていた。

どうも、この村に住む、大モーク王国の役人に、漁業を制限されて

しまっているうえに、関所のせいで移動も制限されているかららし

い。

「いきなりお出ましか？大モーク王国の役人さんたち？」

『その船に継ぐ。ただちにこの村から離れなさい！上陸の可能性がある場合、大モーク王国に対する反乱と受け、我が国からの軍を

出し、貴様らを叩きのめす！それが嫌ならば、ただちにこの村から舵を変えなさい！」

などと、音声拡大機で話している。

まるでこつちが海賊のような状態ですね。

でも、我々が悪いのではないから。

侵入いたしますよ。

陸地へ！

『その船に継ぐ！ただいまの行いは、我が王国に対する反発とする！我が王国の侵入者として、全国に指名手配し、ただちに捕らえることとする』

そう言ったきり、その海岸から離れていったようだった。

やがて、我が船は、陸地につき、降りることとなった。

「ありがとう。ヒミコ様によろしく伝えておいてくれ」

「了解いたしました！くれぐれも、お氣をつけて！」

船長がそういうと、急速に陸地から離れた。

指名手配はマズイため、僕らがそう言ったのだ。

「えらいことしてくれたな！あんたら！」

「軍隊が来たら、我々の町もお仕舞いだ！」

などと、村人たちもさげんでいる。

「なんで伝説の勇者がこんな目にあわなけりやいけないんですかね？」

「ほんとに悪いなミカ」

「ほんまやでモロー、もう少しくよく考えて行動してくれよ」

「結局大モーコ王国とは対立しなくちゃならないんだから、一緒だろ。いつでも」

「巻き込まれる身になれってことや」

「まあまあ悪かったって。でも、船に対して言っただけで、僕らはずっと船のなかにいたんだ。服装を変えておけば、顔までは割れないはずだぜ」

「だったらいいけどね」

顔は割れてない、よね・・・。

ユーラン大陸の初上陸は、超波乱の展開を迎えた。
大丈夫かな。このまま行つて。

その日、さすがに宿を借りる勇氣はなかったので、史上初の野宿でした。

可哀想だったので、ミカには寝巻きをあげて、二人はそのまま土のうえで寝ました。

こんな旅で大丈夫かな？

プロフィール2（前書き）

設定や技の更新があったので、またプロフィールです。

これからも更新があれば、プロフィールは書いていくので、よろしくおねがいします。

プロフィール2

モロー（勇者 男性）

伝説の勇者の血が流れる青年であり、主人公。楽観主義なところもあるが、基本戦闘好みらしく、時々キーンと手合わせをする。基本は剣術を得意とするが、槍も少し扱える。

〈装備〉

満月の剣

三日月の兜

上弦のブーツ

下弦の籠手

満月の鎧

新月のズボン

〈技〉

魔法剣メラ斬り

メラを唱えた剣で相手を斬る技。

魔法剣デイン斬り

デインを唱えた剣で相手を斬る技。

〈呪文〉

メラ

メラミ

デイン

スカラ

マヌーサ

キーン（戦士 男性）

少し粗野な関西弁を喋る戦士。パワーにおいてはモローを上回るが、戦いにおいてはどちらも退けをとらない強さ。

〈装備〉

鉄の鎧（上）

鉄の籠手

鉄のブーツ

鉄の鎧（下）

鉄の兜

大きな鉞

〈技〉

一閃特攻

高速で十字に斧を振るう技。あまりに早く、一筋の光が放たれたように見える。

妄心斬撃

マヌーサのかかった剣の力で、自分の思ったときに幻を見せ、その間に別方向へ動いて斬る技。

ミカ（女性）

非戦闘派の少女。一応護身用の短剣を装備しているが、あまり役には立っていない。お母さんとは離ればなれになったらしいが、本人は旅が楽しいらしく、村の場所もわからないため、モローたちについていつている。

く装備く

黒いワンピース

可愛いカチューシャ

おしゃれなブーツ

小さな短剣

裁判官と陸軍少将

次の日、今までの旅では一番目覚めの悪い朝だった。

ミ力はいつも通りに爽やかに起きたのに、僕たちは地面だったので、朝は結構冷えた。

地面って寒いんだね。

「さあ！もう出ていくか！」

「へえ！？早くないか？」

「そんなこと言ったって、下手したら指名手配になるっていうのに、どうしてのんびりと旅の支度しなくちゃならないんだよ」

っていうか、指名手配される勇者ってどうなの？って気がする。

僕たち何も悪いことなんてしていないのに。

やがて、町中に騒がしい声が聞こえてきた。

どうやら、町の住民が一つの広場に集まっているらしい。

「ただいまより、リフリス村のトムソを、不当侵入罪で首吊りの刑とする！」

「どうしてだよ。俺あただこの町の門の前を通っただけだ！捕まる理由なんて全くないぞ！」

「だまれっ！！勝手に横切ったのが悪い！我が国、大モーコ王国の関所を横切ったのは、国を汚されたことと同等だ！」

「理由になってないだろ！！」

「それでは、これより首吊り刑を実行する」

そういうと、明らかに冤罪であろうその男に、首輪がかけられた。恐らく、その首輪が急に上へ上がり、首吊りの状態になるんだろう。

「お願いだ！助けてくれ！俺は何もしてねえんだよお！！」

「黙れと言ってるんだ！その口をまずはじめに、切り裂いてやる！」

すると、役人らしき人物が、剣を振り上げた。

僕は、こんな状況を黙って見逃すことなど、一切できなかった。

「やめろおお！！」

ギイイイン

剣同士のぶつかりあう音のあと、役人は僕の方を見た。

「貴様、この国の者ではないな。カラ連合国の国民は、麻で作られた白い服しか身につけてはならない。そして、大モーク王国の役人は、赤色のブレスレットを身につける決まりがある。お前は、よそ者か……。だったらチャンスをやろう。その剣を鞘に閉まって、今すぐここから立ち去れ！」

「ハッ！！なに言ってるんだか！！この人は何もやってないって言ってるんだろ？だったらその辺りもしっかりと考えてやらなきゃダメじゃねえの？それに、関所を横切るだけで罰なんてのは、あまりにも横暴すぎるルールなんじゃないかな？」

「よそ者の分際で、我が王国に喧嘩を売るんだな？」

「当たり前だろ？勇者は全てを平等に見るんだからな」

いつの間には、僕の周りには、武装した役人たちが囲っていた。その数、百人くらいかな？

「これより、王国に刃向かう哀れな勇者の刑を実行する。刑の内容は、大モーコ憲法に基づくものである。彼は、裁判官による刑実行を妨害し、その行為に対して強迫した疑いである。彼を、死刑判決とする。意義を申し立てたいものは、今すぐに申し出よ」

無論、キーンが前に出る。

「意義ありまくりやつつの！！お前、横暴もここまでくると、ただのいやがらせやんけ！」

キーンも鉞を構え、今にも攻撃しようと備えている。

「では、死刑実行とする！」

それが合図なのか、急に槍を取り出した集団の役人たちは、攻撃をしかけてきた。

でも、その人たちは、なにかに鍛練した人ではないようで、

「一閃特攻！！」

ザッシイイイイイ

ほぼ全員が吹き飛び、最後には（なぜかミカの方を向きながら）謝

って逃げていった。

「ほお・・・なかなかやるな・・・。ただの旅人、いや、勇者と名乗ったやつでもなかったようだな。だが、まだ、俺たちにも手札はあるんだぜ」

そういうと、彼は、ある人と呼ぶ。

「少将どのおー！」

そういうと、力が強そうな巨体な男が現れた。

「こいつらが王国に逆らおうとする愚かな連中か」

「なんだ？今度は誰？」

「俺の名は、大モーコ王国陸軍少将、ドルイスである！」

そういつて、彼は、巨大な剣を持ち出した。

「この軍隊少将である俺が、勇者と名乗る貴様を、制裁してくれるわ！ー！」

3メートルはあると思われる、装飾がとても多く施された剣を取り出した。

「こいつは、今までのやつとは比べ物にならないくらい強いぞ！」

「わかった」

「ふたりとも、頑張つて！」

戦闘開始だ！！

陸軍少将と雷鳴豪豪刀

「一つ言っておく。この剣は、破壊力があまりにも壮絶すぎる。一撃でも当たれば、肉の塊に変貌する。気をつけてかかってこいよ・・・」

「言われなくてもな！」

剣に勝のオーラまさりのオーラを集中させる。

力がみなぎる。

攻撃力がグングンとあがっているようだ。

「メラ」

剣にメラをかけ、魔法剣を作り上げた。

魔法剣メラ斬り！

ズアアアアッ！

シャキィィィ

しかし、切れたのは、僕の髪。

あいつの腹を斬ろうとした瞬間に、向こうが間合いをとり、僕の剣を払い除け、首から掻き斬ろうとするのだ。

なんとかそれを僕もかわしたのだが、代償で髪を裂かれた。

「あぶな〜」

「なかなかの反応だったな。だけど、それだけでは、決定打にはならんぞ！」

男は楽々と絶対に重そうなあの剣を振り上げた。

「うおりやあああ！」

まっすぐ下へ振り下ろした。

地割れがみるみる起きていった。

「はあああああ！？」

「おつとお。今は本気じゃねえぞ。まだ30パーセントも出してないさ」

はったりだ！

と、思いたいけど、真実と悟らなくてはならないかも知れない。

異様な不安感が包み込んだ。

なぜなら、さつきから、向こうの剣がバチバチと静電気を起こしている。

もしかして、さらに強力な技が生まれ出されそうな気がする。

「一つ・教えてやるぞ。この剣は、全部オリハルコンっていう、高級金属で出来ているんだ。オリハルコンには電気を溜めておく力があるんだ。そして、今、俺の剣にはデインがかけられている。さつき貴様がやった技、魔法剣メラ斬りって名だった気がするが、あれといっしょさ。ただ、負のオーラと一緒に外に放出するから、もっと強力な技になるのは間違いないがな」

そして、バチバチはさらに大きくなり、静電気よりも強力な攻撃力が生まれていた。

「さあ。聖なる神のさばきを受けよ！！」

らいめいしんげきは
雷鳴進撃波！！」

オーラに包まれた電撃が、斬撃と共に襲ってくる。
あんなものに当たれば、一発で勝負がついてしまう。

「これは、仕方がない。さらに強い魔法で、攻撃を相殺させるしかない！いくぞ！レジエンドチーム！！」

メラミツ！！」

三体の魔物と僕から、火炎が吹き出す。

メラより強力な呪文のメラミが四つ分の威力を出し、強烈な技となつて、らいめいしんげきは雷鳴進撃波を襲つた。

ギギギギギギギギ

はじめは両者共に一步も引かない状態だったのだが、

「ちつ、魔法力が、弱まってきた・・・」

メラミを連続的に作動させ打ち付けていたせいで、魔法力がいつきに消費されていったのだった。
らいめいしんげきは

雷鳴進撃波の勢いは一切止まらず、ついにはメラミを全て消し、こっちに向かつてきた。

ドッガアアアア！！

斬撃を盾でガードしたのだが、無論、デインは僕たちを蝕んだ。
いつきに体力を奪われ、息も上がっていった。

「はあ・・・はあ・・・ぐ・・・っ・・・負け・・・るかあ・・・！」

何とか剣を構えて、攻撃に移るが、簡単に押し退けられたあげく、鳩尾に蹴りを一撃浴びた。

キーンはというと、斧をしまい、打撃で攻撃しようと構えている。

「まだまだだあ！」

シュシュシュシュシュ！！

連続的に繰り返されるパンチを、いとも楽そうに払い除け、またもや腹への一蹴。

痛みは確実に、僕らを蝕み、ついには立てなくなってしまうていた。

「モローさんっ！大丈夫ですか・・・！？」

「ミカ・・・来ちゃダメだ・・・！まだ・・・戦い方を・・・教えてない・・・」

「あたし、自分で勉強したんです。モローさんやキーンさんみたいにパワーはなくても、力になれる方法を・・・。そして、覚えたんです・・・」

手から光が輝く。

それは治癒魔法のときに放たれる魔法の光だ。

僕の傷ついた肉体は、みるみるうちに回復していった。

「ホイミか・・・」

体力も回復し、再び動きが軽くなった。

「ありがとう。ミカ。これでもう一回戦えるぞ！」

まさりのオーラ
勝のオーラがみるみる沸いてくる。

より強い相手を見るたびに、倒したいと、願う気持ちが強くなる。

その気持ちは、やがて、パワーへと変わり、勝のまさりのオーラオーラという、実体に変化する……。

「すごい力だな。オーラか？だが、俺だってオーラくらい持つてんだよ！」

あいつの腕から、どす黒い、嫌な感じのオーラが流れる。

さっきまでとは違い、本当の悪のオーラだ。

「よくし。ウォーミングアップはこれまでだ！本気でケリをつけてやるさ！」

「こいつ！」

勇者の天使

「はあああああ！」

「うおらあああああ！」

ギインッ！

これまで、何回も何回も打ち付けた。

しかし、相手もなかなかの力が強く、お互いの実力は半々であることが理解できた。

「へへへ……。すっげえな……。俺にここまでやる気にさせたのは、敵だとお前が始めてかもな……。そうだ……。お前、俺の仲間になる気はねえか？お前なら大歓迎だぜ？」

「……………。勇者がそんなくだらない誘いに乗ると思うか？」

「へっ。立派だな。さすが勇者様だぜ。でもな、仲間のことを忘れてたらダメだぜ？」

「！！！？」

ふと、キーンたちのいる、少し後ろを見た。

「き……。きたねえ……。！」

「さうて勇者様？次はどう出る・・・？」

油断していた。

陸軍少将とモローが戦っているときに、俺たちはその戦いの行く末を今か今かと待っていた。

ミカも心配そうに見守っている。

俺は、しばらくその戦う姿を見ていたのだ。

モローも少将も、なかなかの戦いを見せていた。

やはり、二人とも実力は一緒のよう。

お互いの必殺技を共に相殺できるパワーを併せ持ち、同時に瞬発力や素早さも、どちらにしてもかなりの腕前だ。

そして、俺は気がついていなかった。

後ろから近づく、『もう一人』の敵に・・・。

「動くなあ！！」

それは、ついさっきに、死刑実行を言い渡していた、裁判官。
ミカの喉辺りにナイフを宛がい、

「動くなよあ・・・、動いたら、このいたいけな少女の喉に真っ赤な血が吹き出すぜえ・・・。勇者様ならこんな状態、黙って見過ごせるわけ、ないよなあ？」

「最低やな・・・てめえ・・・」

ミカは、何が起きたかわからないようで、とても戸惑った様子だ。俺や裁判官、モローや少将を見比べながらなにが起きてるのか、順調に整理していく。

そして、現状を理解した途端、パニックに陥った・・・。

「ひやああああ!!」

必死に裁判官の腕を振りほどこうとしている。

「動くなっ! ガキ!! 次動いたら、てめえ二度と口聞けなくするぞ!」

「・・・・・・っ!」

まだただの少女には残酷すぎる脅しだ。頭を恐怖がぐるぐると回っているようだ。膝ががくがくと震え、顔にも恐怖が刻み込まれている。

「・・・てめえ・・・俺らに何をさせたい?」

「武器を置け!!」

それは、キーンとモロー、二人に対して向けられた。ミカの命には変えられない、仕方がなく、剣と鉈を地面に置いた。

「さ・・・地面に置いたぞ。ミカを離してもらおうか」

「残念だが、そういうわけにはいかねえ。とりあえず三人とも、寝

てもらおう!!」

そういうと、後部に衝撃が走ったあと、意識を失った……。

「おいっ！モロー！モロー！起きろ!!」

「んああ……」

はあ！？なんだこれ？」

「知るかよ。起きたらこうなっとったんや」

僕らの現状況。

手を後ろで何かに固定されている。

そしてさらに、腕と腹に縄を巻かれ、それが上へと繋がれている。

「死刑執行の場？……たぶん……」

目の前には、首を引つ掻けるのであろう縄が垂れている。
ということは、僕たちは……？

「勇者様……最後に言いたいことはなんだ？」

裁判官が僕たちを上から眺めて言う。

「貴様あ……！卑怯だぞ!!こんなやり方で!!」

「なんとも言え！我が王国に齒向かった、おろかなる連中のあわれな末路はいつも決まってるんだよ!!」

ぐ……！

下唇を悔しさのあまりに噛み締めた。
隣を見る。

キーンがなんとか振り払おうとしているが、ちょうど、力が入りにくいように上手く縛られているため、全くとれない。

「あれ……？　そーいや、ミカは？」

「そーいや、いねえな」

「あの女が。あいつはもう少し待ってみな」

するとしばらくして、ミカは、縄で結ばれた状態で、向こう側からやって来た。

「こいつぁ、思ったより上物なんだな……どっかにでも売り飛ばしてやるうかと思ってんのさ……」

「ぐぬ……」

この程度の縄なら、キーンも僕も、恐らく粉碎して、打撃を食らわしているのだろうが、そんなわけにはいかない。

ミカを人質に捕らえてある。

きっと僕らが少しでも攻撃的な視線を見せたら、たぶんきっと、ミカは……。

「わかった……僕たちの始末はどうでもいい。何でもしてくれ……！」

「……！　だけど！　だけど、ミカだけは！　ミカだけは見逃してくれ！　ミカは……いいやつなんだ！」

勇者の悪魔

「構わんさ！『勇者の天使』は、今をもって、『悪魔』に変わるんだ」

これを平然といつてのけたのは、裁判官でも、なんと、陸軍少将でもなかった。

「ミカ!?!」

ミカ自身が、そう、答えた・・・。

「ど・・・どういふことなんだ!?!ミカ!?!」

「ふはははっ!

あなた・・・、『猫かぶり』って、諺・・・知ってる?」

「・・・本当の能力を隠して・・・おとなしそうに見せていることだろう?」

「そゝ正解ゝわかってるじゃない・・・あなたと接してたあたしは、まさにそれよ・・・!」

ミカは、そういうと、腰にある、護身用の短剣を握りしめた。

「あなたは・・・あたしを助けてくれた・・・！アルフィンス村でさまざまなゾンビ系モンスターと・・・でも、そこで不思議だとは思わなかったの？」

どうしてこの村にだけ、ゾンビ系モンスターがいるんだろう？

って？」

「・・・思ったさ・・・そして、こう考えた・・・

かつての村の住人たちの負のオーラの力で生まれたのだろう

と」

「ナルホド。でも、それにはいくつか問題点が生まれる。

一つ目は、

たかが盗賊の類いであそこまでの負のオーラを操れるものはいないということ。

二つ目は、

あたしがあの場にいたこと。

だって考えてもみなよ。あんな場所に、少女一人、入れるわけないでしょ？だって、モンスターの数からして、女の子一人じゃ、どう考えても、入ることすら難しい・・・」

「・・・そういうことだったのか・・・」

「そうさ！あたしが真の黒幕・・・！！」

大モーコ王国大将ミカ。よろしく・・・！」

「た、大将・・・！」

僕も、キーンも、驚きを隠せなかった。

今まで、仲間だと思っていた、仲間だと信じてきたものが、最も、敵の総大将に近い存在だったのだから・・・。

「なんだ！可愛い天使は、最悪の悪魔ってことか・・・！
ぐぬううっ！！」

すると、キーンは、縄を無理矢理ぶち破ろうとした。

「かあああああ~~~~っ！！！！はっ！！」

キーンは、全身からパワーを放出させ、縄をぶったぎった。

そして、モローにいった。

「天使が悪魔になったってことは、もう一度、戦えるっていう、ことだ。天使は俺たちから、平和は奪ったけど、逆にそれ以上の、戦いを与えた・・・！」

僕も、全身に、力を込める。

すると、縄はいとも簡単に外れた。

「人質がお芝居とわかった今、お前たちに手加減する筋合いはないっ！覚悟しとけー！」

僕は、勝まさりののオーラを腕に込めた。

なにも、武器がない今は、格闘で戦うしかない。

勝まさりののオーラを身に付けた状態なら、圧倒的な肉体を手に入れられる。全身から沸き出る正義も、彼らに制裁を食らわしてやってほしいという現れだ。

今は、ただ、負ける気がしない。

勝てる！

絶対に！

「あまいな・・・」

すると、ミカの手からは、どす黒い暗黒のオーラに満たされているのが見えた。

「負のオーラだ。どつかの骸骨と戦っただろ？あれもこれさ。全ての源はあたし。産みの親であるあたしも、パワーは相当だよ・・・。なぜなら、あたしは、ひたすら、憎むことしか知らない、殺人兵器だからね！」

僕の腕が、裁判官に当たるその瞬間、ミカの投げつけた負のオーラを纏わせた短剣が、僕の腕を貫いていた。

「っがあああー！！」

「痛い？痛いでしょ？人間って悲しいよね・・・、どんだけ体が痛みで覆われても、裏切られたっていう屈辱と痛みは、それを越える

もの・・・体の傷はホイミで治るけど、心の傷は、呪文じゃ治らないわ・・・」

そついいながら、彼女は、僕の傷口を踏みつけた。
その度に僕は、想像以上の痛みを感じる。

「今、あなたに放った短剣、ただの短剣じゃない・・・。実をいうと、毒を塗ってある、それかなり強力な・・・。
せいぜいもってあと、5分が限界つてところかな？」

伝説の勇者様も、僧侶や賢者の仲間がいないと終わりだね。ホイミをずっとかけ続けたところで、毒が回るスピードの方が圧倒的に早い・・・」

「く・・・あつ」

「伝説の勇者ともあろうものが、女の子にこんなふうに痛め付けられるとは思わない。可哀想にいく。でもね、安心してよ。人間なんて、所詮、ただのクズ共さ」

そついうとミカは、最後の特技へと写ろうとしていた。

毒付きの短剣を、上に振り上げ、強力な負のオーラを宿らせた。

「これであんたは、お陀仏さ！！伝説の勇者の家系も、これで終わるんだ」

負のオーラを纏った短剣が、僕の喉元を突き刺そうとしてくる。
どうにもならない・・・終わりだ・・・。

ズシィィィッ！

「勇者様あ……。なっさけねえなあ!!それでも勇者なのかよ」

キーンが投げつけた、それは・・・、

「せ、正のオーラ・・・!?!」

「お前・・・いつの間に・・・!」

「正しき心を持つ、俺やからな」

まだ、戦いは、これからだ・・・!

勇者の悪魔（後書き）

キーン対ミカとなります！

決闘（前書き）

内容が気に入らなかったために、変えてしまいました。

決闘

「ほお。ボクと戦う気か・・・？」

ミカから発せられた声は、今までよりも遥かに低い声だった。

「それが怪物の声ってか・・・？」

「今までの声は、かなり変えてしまっていたってことか・・・」

「よくも・・・よくもこのにボクこの姿にさせてくれたね・・・。
生かしてはおけない。君たちが、人間であるかぎり・・・なっ！！」

ミカの腕が、怪物のような腕に変化していく。

魔物の種類で例えるなら、オーシャンクローや、ヘルズクローのよう
な、爪が長いタイプの魔物だ。

「どうだ？気持ち悪いか？そうだろう。こんな化け物と一緒に、今
まで冒険を続けてきたんだ。だが、それを悔やむ必要もない。お前
たちは、この場で死ぬ。決定事項だ！」

そういうと、負のオーラを纏わせ、キーンに襲いかかる。

キーンは上に飛び上がってかわした。

「続いて！メラミッ！」

火炎呪文がキーンに放たれる。

「危ないっ！メラミッ！」

火炎をお互いに消化させる。
すると爆発を起こした。

「なかなかの反応だねえ。さすが勇者の仲間だ」
バーディ

「助かった、モロー！」

「へっ。いくぞっ！！ヒヤダインッ！」

「ミカ殿っ！私も加勢を！」

「いやっ。お前の相手は僕だっ！」

僕は少将を相手することにした。

「あんたにはリベンジしないといけないからなあ」

「またか……。もう一度戦うとは、お前も相当な武人のようだな」

そういつて、前に使っていた、雷鳴豪豪刀らいめいごうごうを持ち出した。

僕は剣を持ってないために、素手で構えているのだが。

「……。貴様が剣なしに、この俺とやりあうつもりか？」

「お前が剣をどこに隠したか教えてもらえれば、それに越したことはないがな……」

「教えると思うか？」

「いや」

「そうさ。力ずくで聞くんだなア！」

稲妻ラッシュ

剣を連続的に振り回し、斬撃の壁を作っているようだ。

僕は少しずつ後ろへ下がっていく。

この攻撃は、避けられる気がしない……。

らいめいしんげきは

雷鳴進撃波のような一撃技ではなく、小技の連続打だ。

一撃のダメージは少なくとも、少しずつ確実に命を削れば、いずれは朽ちる。

「ど……どうすれば……っ！」

「さ……てどうしたらいいでしょうか!？」

前に連続攻撃を繰り出して、いわゆる「壁」を作る攻撃。壁を避けて裏に回れば、攻撃が仕掛けられる。

(どうやって回る？僕の跳力じゃ、どうやっても越えられない。でも……このままじゃ……)

「さあ!どうする!？」

(……!……こ、こうなったら、カケだっ!)

「イオ！」

イオを手につくる。

円上にパチパチとイオを作っていく。

「よし。これでどうだ！」

とびあがり、イオを放つ。

すると、その衝撃で上に飛び上がった。

「な、なぬうつ!？」

すると、5mほどとびあがり、見事裏側に着陸をした。

「くたばれっ!メラミ!」

火炎が包み込んだ。

「ぐうおあああああああ!!!!」

しかし、火炎のパワーのみでは、倒すまでには至らない。

「ぐ……うおお……!!」

「悪いことは言わない。いくら悪いやつでも、僕に人を殺すなんて出来ないんだ。だから、降伏するんだ!」

「へ……くへへへ。嫌だっけ言ったら、どうするんだよ……」

「……さあ!」

ノロノロと立ち上がった少将は、刀を手にして、僕に向かう。

「まだ……負けては……いないっ!」

「敵ながら、その心意気だけは天晴れ。敵にするにはもったいないよ！」

そついい終わるか否や、今度はギラを使って剣に纏わせた。

「閃光刀！！」

刀の切り口から閃光が放たれ、ビームのように広がる。さつきとはまたひと味違う攻撃に僕は戸惑う。

「デインッ！」

ギラの閃光をデインで打ち返した。

しかし、その技が何回も放たれる度、デインで応戦した。

「ま、魔法力が・・・！」

「落ちてきただろう・・・？当たり前だ。俺はずっと減らない。だが、お前は減り続ける。武器がない、今のお前には致命的なことだぜ」

「ぐ・・・！」

ピンチ到来か？

決闘Ⅰ 2

魔法力は、底をつきかけていた。

あの閃光は、どう頑張っても逃げようがない。

そして、防具がない今では、防御に徹することも出来ない。

「逃げるだけじゃ、この閃光から逃れることは出来んぞ！」

「ちいっ！！」

すると、地面に、縄が転がっていた。
それを見つけると、

（そうだ！これで！）

僕は手に取る。

そして、

「縄・・・だけど、一応鞭としても使えるだろ・・・」

「へへ。まさかそんな即席の武器で戦うつもりか？俺を舐めてんじやねえぞ！！」

そういうと、今日何発目かの閃光を打ち放った。
しかし、僕はそれを、跳ね返した。

ピュンッ！！

「あっ！あぶねえっ！な、何しやがった！？」

「古代から伝わる、それぞれの武器を巧みに操る者が、掴みとった、鞭を使う技の一つ、

波紋烈!!」

そっ、僕、鞭を上へ上げた。

そして、大回転させる。

オーラを含めて回したそれには、オーラがトルネードのような回転を起こした。

それがやがて、盾のように強固な壁となつて、全てを跳ね返していった。

無論、ギラのような呪文ですら、跳ね返る対象だ。

「な、なんだ!? そ、そんな技もあるのかよ・・・」

「あいにくだが、修行の時点で全ての武器を、ある程度マスターしたからな・・・。これくらいは初級レベルだ。

続いて、攻撃的な技を教えてやろう・・・。これだ!

波芯烈!!」

縄を上へ振り上げ、いつきに下へ振り下ろす。

すると、波のように縄がくねり、下へ落ちた。

弾けるような高い音を鳴らして、少将に当たった。

「ぐ・・・っ。ま、まさか・・・。そんな縄で、ここまでのダメージが・・・!!」

「いくぞっ! 続いて!!」

破烈波!!

少将の武器を、縄でぐるぐるとからめた。
そのまま、手を蹴り飛ばし、武器を遠くへ放り投げる。
これは、本来は盗賊が使っていた技らしい。

「う．．．うおっ!？」

僕は、その剣を遠く、遠くへ放り投げた。

「よしっ。これで無防備だ!くらえっ!！」

これで、勝負が決まった。
だと、思ったのだが．．．。

「うおおりやあああっ!！」

「ぬぐっ!？」

腕が突然、何者かに引き留められた。
今の腕を動かす方向とは真逆に力を加えられる。
全く動けない。

鞭を持つ右手、そして、首にも、何かが巻き付いている．．．。

「勇者さんよおゝ!一度決められた死刑実行は、そう簡単にはひっくり帰らないもんなんだぜ!」

「さ、裁判官．．．!？」

さっきの裁判官が、僕の腕と首を掴んで離さない。

「おおっ。よくやったなあ、裁判官．．．」

「お褒めに預かりまして」

「き・・・きたねえっ!!」

少将は僕が飛ばした剣を、再び手にした。

「へへへっ。やっぱり、最後に笑うのは、俺だったようだぜ？勇者さんよお・・・」

「ぬぎ・・・うぐっ・・・!」

「もう諦めて力を抜け。そうしたほうが、貴様のためにもなる」
「うぎっ・・・ががが・・・」

首に巻かれているほうの鞭が、ぐぐつと力を入れた。
絞められている状態では、苦しすぎる・・・。

「まあ・・・。このあと俺に首を跳ねられるのだから、一緒だと思
うが・・・」

（くそっ。良い手はないのか・・・!!）

「ひひひ。終わりだ!」

もう、良い手は残されていない。

この鞭は、僕の縄と違い、ちよつとやそつとで外れるようなものでも、切れるようなものでも、焼けたりするようなものでもない。

（マヌーサで幻惑を見せても、一瞬死期が延びるだけだ・・・。レジェンドチームだって、いつもは魔法の筒に入れてるんだ・・・。レ
今じゃ出せない）

いつも、レジエンドチームは、魔法の筒と呼ばれる、生物を保存する道具に入れている。

デルパと言えば、なかに入り、イルイルと言えば外に出る。

これを普段は持ち歩いているが、手が取れない今はどうしようもない。

さすがの魔法の筒も、持って言わなくては、効果が出ない。

（もう・・・ダメか・・・）

そう、思った時だった。

「マヒヤドっ!!」

全てが凍りつくような、強力な呪文が、何処からか飛び出した。

「な、なにもんだ・・・!？」

「いや・・・勇者とか名乗るやつが戦っているって聞いたものだから、少し気になって見てみただけさ。そしたら、お前らが苦戦してるのが見えたから、仕方がなく参戦してやったってことさ・・・」

「早い話、助っ人ってどこ？」

「いや、いやいやいや。お前らではなく、俺が真の勇者だ。だから、その格の違いを見せてやりたいだけさ」

そういつて、さっきの少将に向かう。

「たしか、大モーコ王国少将、だったっけか？お前のような雑魚に、

武器を使うのはもったいねえな。魔法で倒してやる。それも、一発で・・・」

「一発だと・・・？この俺を一発で倒すだと？何を言つかと思えば、そんな絵空事か！！おもしろい。やれるものならやってみやがれ！」

そういうと、刀で風ぎ払った。

それをあいつは、いとも簡単にかわし、

「極大閃光呪文、ベギラゴンっ！！！！」

ものすごい熱光線が、少将に命中し、そのまま、少将は吹き飛んだ。

「へっ。ザコめ！」

「な、なんだ・・・！？あ、あいつ・・・」

決闘12（後書き）

新設定

古代から伝わる、さまざまな武器の達人が使った伝説の技がある。

レジェンドチームは魔法の筒と呼ばれる、生命体を入れることができる筒に普段は入っていて、触れながら、デルパと言えは出てきて、イルイルと言えは入る。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1392x/>

ドラゴンクエスト～the fairy tile～

2011年11月18日05時50分発行